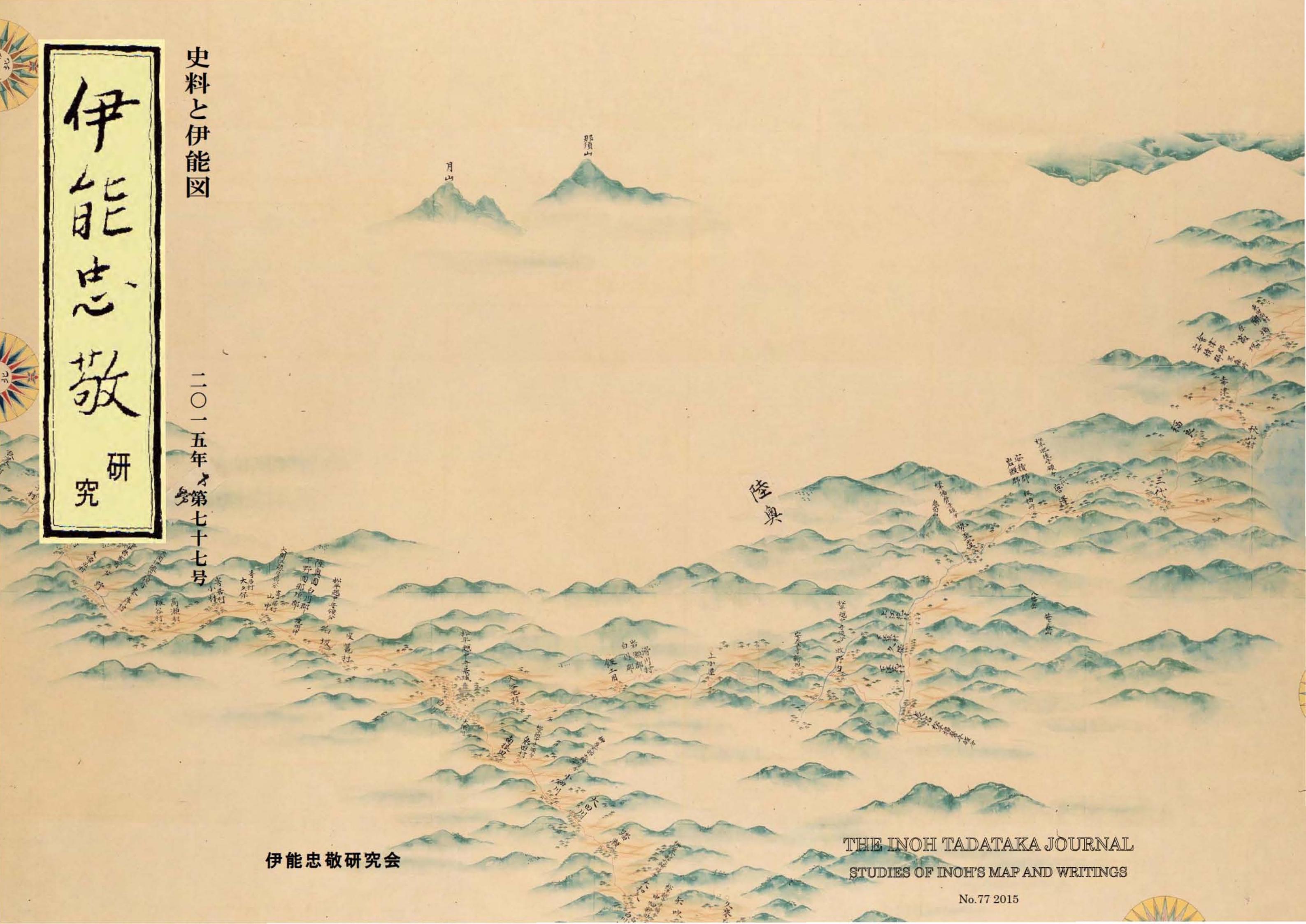


伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一五年
第七十七号

伊能忠敬研究会



THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.77 2015

国立国会図書館蔵伊能大図(大日本沿海輿地全図)

第六八図 陸奥(磐城・赤津・白川・羽前・月山)

享和二(1802)年六月十一日に江戸を発ち羽越を測った第三次伊能隊では、忠敬の身分は天文方高橋至時の弟子だったが、実績を認められて幕府勘定奉行から、御証文という指定数量の人馬を無料で使用できる旅行命令書が渡されていた。

これで幕府の公用事業であることが鮮明となり、経由町村には江戸伝馬町の伝馬役・馬込平八が発信元になつて勘定奉行連署の先触れが、昼夜を問わずというから二十四時間体制で伝達された。町村役人は請書に受信時刻を記載し、自分用の写しを作ると、人足を叩き起こしてすぐ次の町村に走らせた。途中の万一に備え、人足は必ず複数とし、事故があつても間違いなく到着させたといふ。

忠敬以下の待遇も格段に上昇し、宿は安い木銭と米代一日五合分を払えばよい所へ、手当は第二次の約三倍となつてゐる。

江戸をたつた伊能隊は六月二十日越堀宿(黒磯)を発つて、下野・陸奥国境を越え、前将軍補佐役松平定信の白河領に入る。二十一日六ツ半頃白坂宿出立。一里三十三丁歩いて四ツ頃白河城下に着く。ざつと三時半。随分早いお着きだ。ここではゆっくりフレッシュか。後年の日程をみると、十日間に一日くらいの割合で、大きな町で逗留と出てくるが、これは多分定休日だったろう。

今回の旅では十六日目の会津若松に二泊する。これは休日だ。白河は小休止だろう。仕事もたまつていた。藩の領主便にのせて暦局へ書状を出す。これも今回から認められた連絡手段である。会津若松迄の経路を地元村役人と相談して、測量隊の泊宿を出し次のような予定で測進した。

二十二日 上小屋泊、家作良し、天測。

二十三日 牧の内昼食、長沼泊、天測。

二十四日 勢至堂昼食、見代泊。板橋峠の下の唐沢には会津藩の番所があつた。その先

三代の村役人は帯刀して領界まで出迎えた。村役人でも苗字帯刀を許されたものは当然両刀を帶びて武士の姿で出た。しかし、日記には袴に脇差というのがよく出てくる。

村役人も脇差を帶びるのが正装だつたらし

目次

77号

表紙解説

国立国会図書館蔵伊能大図(大日本沿海輿地全図)
第六八図 陸奥(磐城・赤津・白川・羽前・月山) 渡辺一郎

話題

●伊能一族と宮本茶村
伊藤栄子・渡辺一郎・高宮勲

●伊能忠敬測量の『点と線』
汀を走る測線はどのあたりか?

●愛媛県立図書館久門家文書解説
伊藤栄子・渡辺一郎・高宮勲

●伊能忠敬 周辺の人④
平山藤右衛門季忠

●江戸幕府日記を読む②
『日本東半部沿海地図』上覧

●前田幸子
前田幸子

忠敬談話室

●伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて
各地の記念碑・標柱等紹介(五)

●忠敬先生の没月日について
河崎倫代

●全ての道が通じたローマを訪ねて
前田幸子

●小説 林藏と秀藏(上)
戸村茂昭

●石川県支部ニュース
柏木隆雄

●加賀藩測量の足跡をたどる(四)
寺口学

●各地のニュース・会員だより
総会報告・お知らせ・他

●空撮散歩—伊能測量隊の足跡と福島町のできごと
柏木隆雄

●資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版
監修 渡辺一郎 編著 井上辰男

●表紙伊能図にほぼ対応する範囲の現代図は18ページ
下段に掲載しております。

(表紙題字は伊野忠敬の筆跡)

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版
監修 渡辺一郎 編著 井上辰男

伊能一族と

宮本茶村

宮内 敏

はじめに

本会会員であった窪谷悌二郎氏のご尽力により、一昨々年三月、水雲宮本先生没後百五十年祭が茨城県潮来市で盛大に行われた。



水雲宮本先生没後150年祭 潮来市



宮本茶村翁肖像 筆者蔵

宮本茶村（水雲）は今なお潮来の先人として尊敬を集めているのである。

「伊能一族と宮本茶村」と題したが忠敬と茶村の間で、どれ程の関りがあったか明確でない。

しかし、伊能家（香取市佐原）と宮本家（潮来市）は地理的に近く、文化・経済（利根川の水運など）を共有する地域の指導的立場の家柄であり、両家とも商家でもあった。

伊能忠敬の業績については、ここで述べるまでもないので省略する。

宮本茶村は忠敬とは生い立ち、年代（忠敬より江戸時代後期の儒者、漢学者、考証学者、詩人教育者、庄屋、郷士で常陸國潮来村（現茨城県潮来市）の年寄宮本平右衛門高重（注1）の次男として寛政五年五月十五日に生れる。諱は元球、字は仲笏、通称尚一郎、茶村と号し晩年は水雲と改める。

幼少より聰明にして学問を好み余年にして兄篠村（こうそん）と江戸に出て、折衷学派の碩儒山本北山（一七五一～一八一二）の門に学んだ。研鑽すること数年、山本北山が亡くなると故郷に帰つた。親の命により仙台遊學中の兄篠村に代わって家業を継ぎ宮本家十一代当主となつた。

多くの業績を残した宮本茶村は、文久二年六月二十五日、郷土の潮来で七十歳の生涯を閉じた。法名は仁誉義礼信士。墓は宮本家の菩提寺淨国寺に隣接する旧邸内にある。

宮本茶村顕彰碑碑文によれば

「・・・刻苦精勤家産を再興するも富を蓄えるより名教を遺すべしと学問教育に専念、その塾名を恥不若（ちふじやく）（注2）、居所を三香社また隻硯堂と称する。学徳を慕つて來り学ぶ者多く櫻任藏竹内百太郎、伊能節軒、吉川天浦、君浦、松浦の三兄弟、鹿島則文、松岡友鹿等はその門人である。また水戸藩延方郷校に招聘され、下総の学者久保木竹窓と共に郷党子弟の教育に尽力する。庄屋となつては常に村民を慈しみ凶年に備えて義倉を設け天保の飢饉には私財を投じて窮民を救う。水戸藩主徳川斉昭の藩政改革にあたっては數度にわたり海防教學の意見を上書する。

宮本茶村（一七九三～一八六二）

天保十四年篤学と藩政村治の功により郷士に抜擢される。然るに弘化甲辰の国難が起るや江戸に上り齊昭雪冤の運動に参加、そのために捕われ水戸藩赤沼の獄舎に繋がれる。幽囚三年、この間も自若として詩を賦し志を述べる。後に世俗を避け著述に没頭、関城繹史、諸族譜、常陸國郡郷考、常陸長歴等多くの名著を残す。知己交友また多く同門の梁川星巖、大窪詩仙、菊地五山、水戸藩の小宮山楓軒、会沢正志斎、藤田東湖、杉山復堂、立原杏所、土浦の色川三中、下総の久保木竹窓、清宮秀堅等と親しく、三河の渡辺華山、羽前の清川八郎、長州の吉田松陰の来訪も受ける。学者、教育者、庄屋、郷士として数多の功績を遺し・・明治四十年十一月十五日正五位を追贈される。」とある。

（注1）宮本平右衛門高重・下総国高田村宮内清右衛門正壽の四子で宮本家の婿養子となる。

（注2）恥不若とは「人に及ばないことを恥ずかしく思いなさい。恥ずかしいと思ったら一生懸命勉強しなさい。そうすれば、すばらしい未来が開けます」という意味です。潮来市を担う若い人達にこの言葉を贈ります。

（平成十五年七月、宮本茶村生誕二〇〇年祭 潮来市長今泉和）



宮本茶村 顕彰碑 潮来市

水雲橋

前川は常陸利根川からJR潮来駅付近で分流して延方の南を流れ鰐川に合流する4km程の川で、江戸時代からの重要な水上交通路であった。川の北側は古くからの集落で南側は新田開発による地域で先の震災では液状化被害が大きかった。この前川の河口にあるのが水雲橋で太鼓橋とも呼ばれる。橋名は郷土の先人宮本茶村の晩年の号から「水雲橋」と命名された。

源烈公（徳川斉昭）書状

後に茶村は水戸藩主徳川斉昭の藩政改革にあつて数度にわたり海防教学の意見を上書する。天保十四年篤学と藩政村治の功により郷士に抜擢される。

源烈公書簡

倅尚一郎事、多年好学、且て門人取立合満足也、此の上郷士、郷医村役人等之倅其の外僧祝などに至る迄取立て候様に随分心懸く可き也、但し百姓の文学出家好む事は、却つて業を失う本なれハいらぬ事也、只一筋に己か忠孝を志さす所を行ひて勤農いたす

三月十九日
宮本平右衛門へ

源烈公（徳川斉昭）から尚一郎（茶村）の父高重への書簡

潮来町教育委員会資料より抜粋

伊能一族

『佐原町史』によれば、「天正以前の佐原は矢作城主国分氏の領地で微々たる村落で、千葉氏衰滅の後は国分氏の臣、伊能、長澤、園城寺が移住し草分け百姓となつた。・・天正十八年徳川領となると代官吉田佐太郎支配となつた・・」とある。

『大龍寺古文書の写』（筆者蔵）から伊能氏の系譜を調べると、その祖の大神朝臣惟基（おおみかわそんこれもと）は弘仁中（八一〇年代）豊後国を領したという。その子惟季は大和国高市郡西田郷に居住し天慶四年（九四二）源経基に従い藤原純友征伐に功を建て下総国大須賀荘の地頭に任命され名を景能（かげしげ）と改め伊能を姓とした。

時を経て景朝の代、義経に好意を寄せて頼朝に職を奪われ、その領地は千葉介平常胤の四男胤信（大須賀胤信）に与えられた。以来、大須賀神社の祭祀を掌るのみで家運は退勢をたどつた。

後に式部という者が出て古河公方足利成氏に従つて戦功を立て家名を再興した。さらに何代かを経て、朝辰（心月）と言う者、里見氏が房総を風靡する時代、敵将正木大膳（大膳の子説も）が下総を侵略すると、国分氏の遺児を庇護し矢作城（現香取市大崎）を守り、善戦するも天正十四年七月九日（一五八六）落城し自害した。時に七三歳、法号を高明院殿因州刺史心月道性大居士という。

その子は父の遺命を守り小田原城落城の後、国分氏の遺臣と共に民間に下り佐原村に移住した。それが伊能三郎右衛門家（十一代忠敬）と伊能茂左衛門家（七代魚彦、十代節軒）の祖であるという。伊能忠敬記念館付近一帯は伊能茂左衛門家跡地で、小野川を挟んで対岸の現伊能忠敬旧宅一帯は伊能三郎右衛門家跡地である。

国学者 桜取魚彦（小野川を挟んで忠敬の先輩）

本名を伊能景良（かげよし）といい伊能茂左衛門家の七代目の当主である。桜取魚彦（かとりなひこ）は雅号である。三七歳で賀茂真淵（注3）に入門、五年後に家督を長男に譲り夫婦で江戸に住まい、賀茂真淵の高弟として国学に専念した。

一般に、こげんていの編纂に始まり、「櫻之嬬手」（ならのつま）は彼の死後、関西の学者により刊行された。二三歳年下の忠敬にとって、先輩である魚彦の生き方が忠敬に影響を与えたであろうことは容易に推測できる。

（注3）賀茂真淵（かものまぶち・一六九七～一七六九）遠江国敷智郡浜松庄伊場村（静岡県浜松市）の賀茂神宮の神主岡部家に生まれる。享保十八年上洛し国学者荷田春満（かだのあずまろう）の門に入る。

翌年江戸に移り歌文を教える。延享二年（一七四八）、五十歳の時、田安家和学御用として仕える。寛延二年（一七四九）に『萬葉解通釈』、宝暦七年（一七五七）に『冠辞考』を著す。田安家を辞して隠居した宝暦十年、『萬葉考』総論・卷一を完成する。この間、楫取魚彦・加藤千蔭・村田春海をはじめ、多くの門人を抱え国学および歌壇に大きな地位を占めた。明和五年病没。七三歳。

伊能茂左衛門家と宮本家の姻族関係

窪谷悌一郎氏の調べによれば前述の七代伊能茂左衛門家当主伊能（桜取）魚彦の妻は潮来宮本家の娘、阿留が嫁したが延享四年十七歳の若さで没している。また、九代伊能茂左衛門景海は婿養子で宮本家七代平右衛門徳直の次男である。

それよりずっと後、十三代厚太郎氏の妻も宮本

家の娘しち（邦子）である。

当時の婚姻関係は家格の釣り合いに重きを置いたためか同一家と何代にもわたって通婚しているケースも珍しくない。同業者である場合も多く商売上の仲間であり競争相手でもあった。

忠敬は宮本家の娘を甥の嫁にと考えた

忠敬は実兄の神保貞詮の次男で測量隊に供侍として同行した神保庄作（伊能七郎右衛門豊秋の二男）を新地に分家し庄作を養子にしようとした。嫁にしてはどうかと妙薫（忠敬の長女稻）宛てに書状を出している。

書状の潮来宮本平太夫の娘とは誰か

高田清左衛門筋とは旧下総国高田村（現銚子市）の宮内清石衛門正壽のことである。正壽は老中田沼意次を介して印旛沼・手賀沼・長沼の干拓に巨資を投じたが田沼が失脚し失敗に終わった。

後、長男に清右衛門を譲り分産し清左衛門（濱宅）と名乗つた。（隠居分家だが実権は持つていた）

宮本家は代々平右衛門か平太夫を名乗つてゐる。九代・平太夫俊道（配は正壽の長女で高重の姉）十代・平右衛門高重（正壽の四子で配は俊道の妹）十一代・尚一郎（高重の次男で宮本茶村）

書状の娘だが高重の長女ミヨ、二女ミチ、三女ミヤ、茶村の長女たにが考えられる。

しかし、書状は妙薫宛てなので一八一〇年妙薫に改名した年以降、忠敬の没年の一八一八年まで

重の二女ミチは十一歳で亡くなつており、三女ミヤは年齢に達せず該当しない。（後に布留川家に嫁

新地ち中宿藤左衛門ヲ以、潮來宮本」平太夫娘を嫁ニ質ヒ申度旨、其方江」相談有之候ニ付、我等承知致し申間敷、「御あいさつ被成候得共、是非ニ願くれ候様被相頼、無炎仰遣され承知致し候、「匂宮本家柄井高田清左衛門縁組之筋、「前ミハ大家ニ而不相当ニ候得共、近年ハ困窮ニ」相成候よし、當時新地縁組隨分不苦哉と存候、只庄作儀性質静「魯なる斗にて、家事執斗才覚等」一切ニ無之候間、本家ニ而二、三年も奉公」為致、執斗方かなりこ相成候上にて、妻も為持可申存候、其上新地も無尽金」取納り不申候而是、身上向暮し方も相分り」申間敷候、當時ハ本家、永沢本家両家共「身上向キ六ヶ敷、逼塞致し候時節、」不取極の新地にて取急ギ姫を取候ハ、「自然と物入ハカヽリ、行可也ノ相統も」無覺束候、尤庄作儀性靜なる斗にて、」才覚才知も無□候得ハ、急度新地相続ノ」器量も不相分候、本家ニ而二、三年も憚かせ「心体才覚見届ケ、其内ニ無尽ノ納り方」暮し方振合見届ケ、姫ヲ取候ハ、「大丈夫と存候、無尽金納り方年々暮し方も」不相分、取急ギ嫁を迎候上ニ而、暮し方」井ニ庄作弥不器量ニも候ハヽ、進退惟窮」と申ものとなり、外聞も其身もツマラヌ事ニ」相成候、当家の株敷相応ノ身上さへ、「借用の為ニ過塞致し候、今三、四年も」見合、夫ニ而も身□向直り不申候ハヽ、「佐原省内ヲ不残我等方江引取、是非ニ」本家ヲ大丈夫ニ相統致候様と工夫致候、「其考ニ而ハ新地此度之縁組甚以不安心と」存候、新地兩人とも無撫相談を差留様ニ而、「甚氣之毒ニ候得共、身上ノ浮沈一大事之」事ゆへ、我等存寄無遠慮申遣し候、「右之段新地御兩人、名主藤左衛門又庄作へも」能ヒ御申談し可被成候、尤宮本ノ娘當十四才ニ」御座候よし、是も二、三年相延候而も宜候、「夫共取急キ婚姻致し、其後身上向」差支、致難儀候面も不苦と被致覺悟候」ハヽ、無是非候間先方ノ存寄宜候、下拙ハ庄作儀」二、三年相タメシ不申候而ハ安心心致候、「猶追と可申入候、以上

ぐ、従つて高重の長女ミヨと考えられる。ミヨは父高重の実家である宮内清右衛門十二世胤繁の配となつており忠敬の願つた縁談は成立しなかつた。

伊能三郎右衛門（忠敬家）家を再興した節軒

伊能茂左衛門家十代景晴は節軒と号した。常陸潮來の儒学者、贈從四位宮本茶村に学び識見に富み、醤油醸造業の傍ら公共事業に盡瘁（しんすい）し藍綬褒章を下賜せられた。

『佐原町史』によれば、「・津田山城守より里正、五区取締役となり苗字帶刀を許される。（里正職二八年、物頭席となる）天保の凶荒に際し毎日朝かゆを窮民に・・文久年間水戸浪士騒乱には清宮秀堅らと折衝し解決した。小野川の改修にも尽力した・・」とある。

伊能三郎右衛門家再興

節軒には二人の娘があり、長女むらには婿（現銚子市野尻町滑川勘兵衛の四男で後の茂左衛門十一代当主。筆者の高祖母やすの弟）を迎へて家を継がせた。

次女いくには海保長左衛門の三男景文を婿に迎えて忠敬の孫忠誨（ただのり）の代で絶えていた伊能三郎右衛門家を再興させた。

茶村と節軒のエピソード

伊能景晴（節軒）は三歳で父を失い、母に養育され縁戚となる宮本茶村門下として家業や漢学について学んでいる。その頃のエピソードを「明治四二年五月十六日於潮來町長勝寺執行行方郡教育会主催宮本茶村先生贈位祭講演筆記」に記された文学博士市村瓊次郎講演の一節から紹介したい。

「先生の一生の間は変化が多く、商業、教育、著

述等に従事しました。商業の時眞面目にやつたよう見えます。五朔君（茶村の孫）から聞きましたが、佐原の伊能節軒翁の話に、翁が小僧として先生の店につとめて居た頃、質物を受だしに来た人が一文足らぬというので負けてやつた。然るに勘定のときに合わないので、先生から其譯を詰められた。因つて先生に其の事実を話すと先生は、座を直し、かやうの心懸にては貴様は伊能の家を興すことは出来ない、伊能の家を興す考えがあるならば、その一文を取つてこいと云われた。翁は甚困つたが、自分の財布から出して其の場を繕ふのは、先生を欺く譯になるから、遂に、先方に往きてその一文を貰つて來た。其時先生はそれで伊能の家を興せるだろうといつたが、翁は果たしてその家を中興したといふことあります。悪くいふと冷酷吝嗇に聞こえるが家を興そうという者に對しては之位の事でなければならぬと思ふ、先生が眞面目であつたことは、その著述、常陸史料や關城驛史等によりてもわかる、教育についても、また忠実であるもので、常に儉約にて惡衣惡食に安して居りました、要するに、その家産を恢復したのは勤儉の結果と思います。又、先生は朋友に信に厚かつた。藤田東湖が自殺をしたといふ風説を聞いて、直ちに駆けつけたということもある、東湖初め多くの名士と交わりましたが、其送られた手紙によりても、極めて信を重んじた人と思ふ、全時に義といふことに意を用いるいられました、即ち勤王の大義に心懸けたによつて正五位を贈られたるは申すまでもないことです。又天保飢饉の際は、財産を傾けて饑民を救われた、凡て、金があつても、人の爲めに用いなければ守銭奴に過ぎない、先生の行には、所謂、これ信、これ義

で、醇厚俗を成し、華を去り實に就き、彊めてやまざる風があると思ひます、即ち自ら手本を國史にとつて忠臣孝子の跡を研究しましたのは、祖宗

の遺訓と國史の成跡とを、國民の・・・と、講演者の市村瓊次郎博士も指摘しているように

茶村は一見冷酷でケチに聞こえるが、家を興そぐとする者に對して覺悟と眞面目さを問うたのでは

ないだろうか。忠敬も逸話の中での話であるが、使用人に対し些細なことでも、ごまかしや不正を極端にきらつていた。兩人のこれを当時の商人基質と言つてしまふのは當を得ていなかつと思う。

忠敬の内妻とされる大崎栄と宮本茶村

才女栄の大崎家について

十年以上も前になるが本会会員であった佐原の小島一仁先生宅を訪れたときのことである。先生は伊能忠敬研究会誌三三号を示して「最近分かつたことだが」と言つて話された。

それは忠敬が曆学修業に江戸へ出てからしばらくして、深川黒江町の隠宅で生活を共にした若い女性で内縁の妻とされる才女栄のことであつた。その才女栄は井上ひさしの小説「四千万歩の男」では学者おいらんとして登場し、四書五經を白文で苦も無く読み算術も図面も引ける才女として面白可笑しく書かれている女性である。

会誌三三号小島一仁論文（注4）から、才女栄が大崎栄であること、その大崎家は潮来牛堀の清水（きよみず）地区で大山守や庄屋を務めた旧家であることが書かれていた。

大崎家とは筆者の父の時代まで年賀状の付き合いがあつた大崎家であることがすぐ分かつた。

大崎家には筆者の祖母の姉（関戸はる）が嫁い

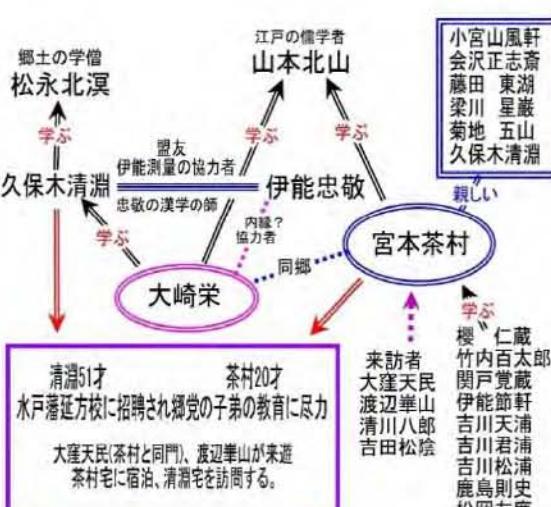
でおり、後に祖父の姪（海上八幡宮の松本勝子）が嫁していたからである。因みにもう一人の姪（松本比佐志）は宮本家に嫁している。

（注4）桂文庫主宰 柴桂子「江戸おんな考」第六号 片倉比佐子氏の論文

大崎栄の学びの関係

伊能忠敬と久保木清淵は十七歳の年齢差があるものの互いに友として親交を深めた盟友である。宮本茶村は寛政五年（一七九三）生まれなので忠敬とは四十八才の年齢差である。大崎栄は寛政十年（一七九八）に忠敬の内縁になつたとされる。この時の年齢は不明だが二十一～二十五歳と仮定すると、忠敬とは二八～三三歳の年齢差であり久保木清淵との年齢差は十一～十六歳となる。

栄が清淵から学んだ場所はどこであつたであろうか。忠敬とのつながりは清淵を介してであろうか、興味のもたれるところである。



絹布肉筆 → (右)
縦 51.2cm、横 51.2cm
菊池五山、宮本鉉(篁村)
山崎雲山?、他
下は右写真の「五山」
部分を拡大 (筆者蔵)



一方、宮本茶村は（九歳）よ

り五言絶句の詩を作り非凡な才能で知られていた。

文化四年（一八〇五年）兄篁村と共に江戸に出て山本北山（江戸の大儒学者）に入門している。（茶村の年齢十六、七歳で入門か）

国竹枝の詩と供に菊池五山（注5）の「五山堂詩話」に採録され名声を博した。補遺卷一には、

大崎栄の遺稿も収められている。（注6）

その後、文化九年（一八一二）山本北山の死により帰郷、親の命により家督を継ぐ、兄は儒学を以つて廄橋仙台に遊学「折衷学を以つて聞ゆ」とある。（潮来町教育委員会資料、仙台人名大辞書）

大崎栄も山本北山に入門（注7）している。前述の仮定からすると、その頃の栄の年齢は二十九三五歳であり、同時期に茶村と同じ学舎にいた可能性が出てくる。

小島一仁先生によれば「栄は山本北山が死去した為、弟子の朝川善庵のもとに身をよせたので

は・・・と述べている。（注6）そうだとすれば、

山本北山が死去するまでの数年間、茶村と一緒に学んだことは確実である。

宮本茶村と大崎栄は年齢差があるものの、両者とも出身は現在の潮来市内であり、大家であった。

年代、出身地、漢詩という繋がりも見えてくる。

久保木清淵と宮本茶村の年齢差は三歳、共に延方校に招聘され郷党子弟の教育に当たっている。

両名は大窪天民や渡辺華山らの来遊を受けている。大窪天民（一七六七年）もまた山本北山の門人である。佐原市史によれば渡辺華山は潮来で宮本茶村家に泊まり、銚子を訪れる途中津宮に立ち寄り久保木清淵を訪ねている。

（注5）明和六年（一七六九年）菊池室山の子として生まれる。天明七年京都に遊学し柴野栗山の塾に入門。この年、柴野栗山にしたがい江戸に出る。文化四年（一八〇七年）五山堂詩話の刊行により菊池五山は江戸の文化人としての地位を確立した。文豪菊池寛は一族の子孫である。

（注6）香取民衆史9「伊能忠敬の家族たち（四）

ミチの死後に」小島一仁によると、栄の自叙伝に「：余初め總に在りしどき灌木清淵先生に学を受け、幾許（いくだ…たくさん）ならずして都へ帰る。北山先生に謁する事を得、歳三十四、家と永訣す。寡居多年、嘗々（けいけい…孤独、頼るところない様）として恃むところなく紡績の余、書を読み、詩を作る・・・とある。山本北山は文化五年（一八一五年）に死去している。

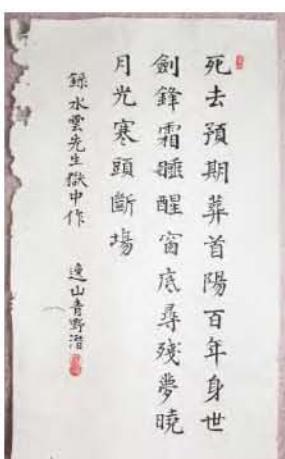
（注7）伊能忠敬研究第33号「才女・栄」小島一仁「三十歳をすぎてから漢学者山本北山の門人となる・・・とある。

東北遊日記にみる茶村と吉田松陰

松陰は嘉永四年（一八五二）十二月十四日に江戸を発ち、尊王攘夷の地である水戸で多くの水戸藩士と語り合い東北地方をめぐり海防の現状を視察した。この時の旅日記が『東北遊日記』である。これによると宮本茶村（六十歳）は嘉永五年（一八五二）一月六日、吉田松陰（二十三歳）の来訪を受けている。

茶村は藩主斉昭に海防教學の意見を数度にわたり上書している。また斉昭雪免運動に参加し水戸藩赤沼の獄舎に三年幽囚された。この間の生き方が若き松陰にどう映ったであろうか。何らかの影響を与えたと見ることはできないだろうか。

茶村は次の獄中詩を披露している。



宮本茶村（水雲）獄中の詩
青野逸山潜（明治期の書家）
筆者蔵

この詩は松陰により持ち帰られ松下村塾で詠われていたと云う。

翌日の七日夜には松岸（現銚子市）に着いて宿す。八日は長塚・本城・銚子港まで視察する。

利根川が海に注ぐ所、この地形が銚子の名の所いか。戸数多く繁盛しており店間甚だ江戸のよう



「松陰先生曾遊之地の碑」
銚子市川口神社参道

である。港口、砂泥堆積し舟の通り便ならざる憾みあり（波崎側の事か）、守備も单弱と記している。
(銚子の川口は日本三大難所の一つで、自分の身は自分で守れの意味で「銚子川口てんでんしおぎ」と言われている。

松陰は銚子港と題する漢詩を作っている。
詩は東北と常陸・江戸を結ぶ中継港として賑合う銚子港の様子を詠う一方、外国船に対し守備が弱く地の利に恃むしかないことを憂いでいる。

大崎治郎太について(才女栄の大崎家)

大崎家は江戸時代、代々大山守（大庄屋）をした旧家である。治郎太は大崎家当主大崎徳三郎の長男として慶応二年に生まれた。

十八才で家督を継ぎ当主となつたが、民権運動にのめり込んだのはその後間もない頃と思われる。多感な青春時代一途に純粹に社会正義はこれだと目覚めたようである」（鹿行の文化財第25号今泉元成氏より引用）。

民衆の政府に対する実力闘争が激化すると、活動家の逮捕など弾圧が厳しく行われ、民権運動は衰退へ向つた。民権運動挫折後、関戸覚蔵の長女はると結婚。義父は衆議院議員であった。大崎は潮来を本社に水戸・佐原に支社をおく新聞「東風」創刊の一面トップを関戸の「東風の宣言」が飾つた。国会開設が目前に迫ると再び新聞・講演会など活発化する。大崎（二十三歳）も明治二年土浦



潮来市清水

大興院春岳寿照道顕居士
徳三郎義徳長男
自青年奔走自由民権運動子
在米三十餘年帰國不得志矣

伊能忠敬

との関係については本誌でも度々紹介されてるので省略する。

宮本茶村と久保木清淵の関係だが年代差はあるものの濃密な関係であったと思うのだが、それを示す資料を見出せない。

清淵は文化五年（一八〇八）、水戸藩の小宮山昌秀（楓軒）の要請で宮本茶村とともに水戸藩延方（茨城県潮来市）の郷校で三人扶持の待遇を与えられている。とすればかなりの頻度で会っていたことになる。清淵は茶村の漢詩の才能を認めていたことについては茶村に依頼している。

栄は清淵に学んでいる。栄が学んだ場所はどこであったろうか。潮来か津宮か。栄は後に忠敬の内妻？助手になつてゐる。栄を忠敬に紹介したのは清淵か。栄を山本北山に紹介したのは誰か。

忠敬留守中に家を出た栄の目的はなんであつたか。分からぬことばかりである。

おわりに

宮本茶村家と伊能一族との関係を整理して紹介する予定であつたが結果的に羅列するだけとなつた。

楫取魚彦、伊能忠敬、久保木清淵、大崎栄、宮本茶村、伊能節軒、吉田松陰・・・と年代別に並べて調べていくと網目のように繋がっていく。

限られた地域の話であるにも拘わらず、当時の日本を取り巻く外圧の変化に変革を求めるエネルギーの高まりを感じるのである。

末筆になつてしまつたが、潮来の宮本茶村先生のことは同郷で宮本家とも伊能家とも縁戚になる郷土史研究家で本会会員の窪谷悌一郎氏が執筆されるのが最も適任と思っていた。今はそれも叶わぬことになつてしまい残念である。

ご冥福をお祈りしたい。

伊能忠敬測量データの『点と線』

一汀を走る測線はどのあたりか?—

戸村茂昭

はじめに

本稿は、伊能図において汀線を走っているように描かれている測線が、実際のところは波打ち際にからどの程度の位置関係にあるのか、松本清張の「点と線」という推理小説にヒントを得て、伊能図とその地図を完成せしめる根拠であるところの測量数値データに内在する点と線を活用して、ミクロ的な場所の特定を試みたものである。

一、房総における伊能測量の「点」

筆者の産土の地であり終の棲家と決めている場所は、伊能忠敬の生誕地に近い九十九里地方である。そのような縁から、以前、房総の伊能測量について、伊能忠敬測量日記と伊能図とを連携させた「第二次測量追跡記事(房総)」¹⁾を纏めてみた。

それによると房総での止宿先は合計二十七ヶ所であったが、天測したのは十六ヶ所(伊能図上に☆印が表示されている止宿先)である。その内の十五ヶ所についての北極出地データは「大日本沿海実測録」²⁾によれば表1のとおりであった。

その天測箇所が二十一世紀の現在どの地点であるかを筆者が特定できる場所は次の三ヶ所に過ぎない。

度が追い付かなかつたようで、天測に使った器具の中象限儀の目盛りを目の子で読み取り、一秒か

表1.房総において天測した止宿先
及び沿海実測録に記載の北極出地データ

伊能図上で☆印のある止宿先	沿海実測録の記録
五井宿(本陣、甚五左衛門)	35度25分半
木更津村(名主、八左衛門)	35度23分
富津村(名主、嘉左衛門)	35度18分半
湊村(五郎右衛門)	35度13分
金谷村(名主、四郎左衛門)	35度10分半
勝山村(名主、又右衛門)	35度08分
那古村(那古觀音)	35度01分半
州崎村	34度58分半
北朝井村(名主、十左衛門)	34度58分
江見村(淨照寺)	35度03分半
天津村(名主、弥平衛)	35度07分
岩和田村(名主、庄兵衛)	35度10分半
小浜村	35度14分半
中里村(名主、五左衛門)	35度25分半
屋形村(海保兵右衛門)	35度36分半
桃子・飯沼村(田中吉之丞)	35度43分

表2.房総において天測ポイントが特定できる地点の
現在の日本測地系緯度

ポイント	沿海実測録	日本測地系緯度	日本測地系(度分秒換算値)
①那古村(那古觀音)	35度01分半	35.027644	35度01分40秒
②江見村(淨照寺)	35度03分半	35.063025	35度03分43秒
③屋形村(海保家)	35度36分半	35.620719	35度37分16秒
④本須賀		35.564547	35度33分52秒

なかつた。

① 那古村 (那古觀音)、

② 江見村 (淨照寺)

③ 屋形村 (海保兵右衛門)

その三ヶ所の地点の現在に

おける日本測地系緯度³⁾は表2の通りである。なお、表2における④本須賀村は天測の出来なかつた止宿先である。

表2によれば、「度」の位も「分」の位も、沿海実測録の緯度と現在の日本測地系の緯度とは殆ど一致しているように見える。一方「秒」の位は伊能測量の時代では測量器具の精

ら三十秒までは「半」、三十一秒から六十秒までは繰り上げの「分」で表現している。この状況から考

えて総括すれば、伊能測量の結果で制作された伊能図の緯度の精度は、三十秒(距離換算で一キロ弱)未満を無視した地図であれば、現在の地図とほぼ一致する精度であると見なすことが出来るようと思われる。

二、房総における伊能測量の「線」

伊能測量の「線」と言えば、伊能図の上に描かれた朱色の測線である。図1は伊能忠敬の生誕地である九十九里町にある作田川の川岸から表1における③(屋形)まで(大凡十五キロ)の伊能アメリカ大図第八十九号の部分である。

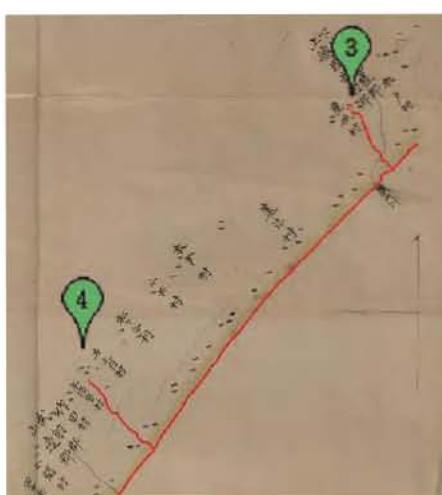


図1.九十九里～横芝光町までの測線

この伊能図は、前章で述べた伊能測量の「点」の分析で述べた精度を考慮すれば、現在の地図の緯度とは最大「三十秒(距離換算で一キロ弱)」の相違はあるかもしれない。しかしながら、図1における測線上の二地点間は僅か十キロ強に過ぎない範

囲での議論に過ぎない。その範囲内で伊能測量の優れた導線法の精度で測られた結果で描かれた測線であるから、この測線そのものの端から端まで誤差は百メートル（鯨尺で大凡一町）を超えることはないようと思われる。

そのような視点で図1をつらつら眺めて見て疑問に思うのは、測線が波打ち際を走っているということである。九十九里海岸の浜辺は遠浅であるから、潮の干満で汀線が数十メートルの範囲で変動する。また、図1の地域には小さいながらも河川が2本あるが、測線はその川の上も走っている。小さい川ではあるが、それでも河口は五十メートル前後の幅がある。つまり橋の無い河口を測量するのは難儀であつて本来であれば測線が途切れ居なければならないように思われる。実際は一体どうだったのであろう？そのような疑問が湧いた。

そこで、測線そのものの全体の誤差が百メートルを超えることはないと考えられる範囲の図1上の測量線を抜出して、現在の地理院地図の上に重ね合わせて見た（図2参照）。但し、重ね合わせに当たっては、現在でもそのポイントが特定可能な止宿先であるところの表1における③屋形と④本須賀のポイントを重ね合わせた。その結果、測線は汀ではなく、汀から数百メートル離れた現在の九十九里ビーチライン（千葉県道30号飯岡一宮線）に大筋的には重なつたのである。しかしながら、必ずしもピッタリと重なつてはいないので、正確を期すために、国土地理院から最近提供された歴史的農業環境閲覧システム⁴⁾から入手した明治初期の地図で検討を加えることにした。

図3の右側の地図は、現在の地図上における本須賀の止宿先であり、左側の地図は対応する明治



図3. 明治初期の本須賀の地図



図2. 地理院地図への伊能測線の重合せ

図4によれば、止宿先への測線は明治初期の道路の上に殆ど一致して重なつてている。そして、伊能図では波打ち際であった測線が九十九里ビーチラインと当時の汀線との中間の砂浜上を走つているように見える。その砂浜の部分を拡大して見ると（図4右上隅）、測線が走っているあたりが恰も砂丘であるかのよう色濃く表現されている。

そこで更に国土地理院が提供している明治初期の低湿地帯⁵⁾を表現している地図（図5）を見るところ、その部分は当時につけて砂丘と海との境界、つまり満潮時の汀線であるように表現されているのである。

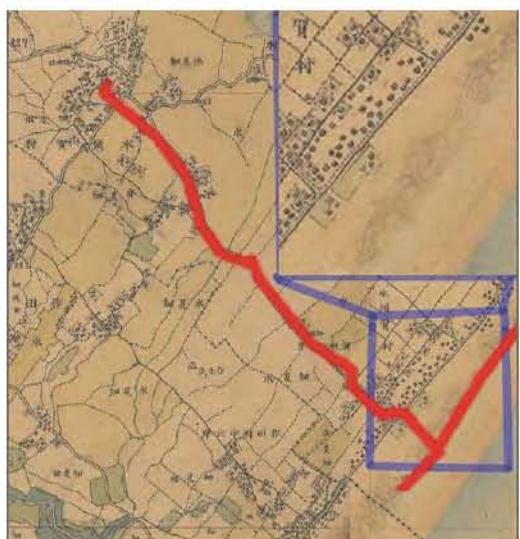


図4. 明治初期の地図への測線の重合せ

初期における本須賀の止宿先である。つぶさに対比してみると当時の道路の名残が同じ位置関係で随所に残っているので、この明治初期の地図は評価に耐えうるように思われる。図4は、この地図の広域図の上に測線を重ね合わせたものである。

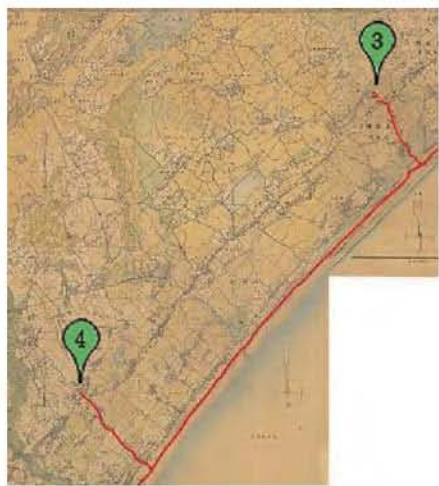


図6. 明治初期の地図を走る測線



図5. 明治初期の低湿地帯

結局、九十九里海岸の伊能測量は満潮時にあっても波が押し寄せる汀線を測量していたと結論付けることが出来るようである。

念の為、明治初期の地図に対しても測線を重ね合わせたものを表現すれば図6のとおりである。

三・終わりに
夏休み自由研究のテーマとして「汀を走る測線はどのあたりか?」を設定し、チャレンジする過程で、どうしてものはつきりさせなければならなかつたのが、本須賀の止宿先である「五左衛門」家



五左衛門家の門（右上は扁額）

の所在であった。伊能忠敬研究会の会員ではあるが研究者には程遠い浅学の徒である身の悲しさ、「五左衛門」家の現在の場所のことが既に伊能忠敬研究会報第二十六号(2001)で掲載されていたとは露知らず、筆者は本須賀地区に分け入り「この辺りで五左衛門という屋号のお宅を知りませんか?」と尋ね廻ったのであった。しかし、色よい返事は数軒まわっても返つてこず、諦めようと思つた矢先の五軒目で「あく、それなら二軒隣の行木幹夫さんちですよ」という返事、勇んでそのお宅を訪問、伊能測量隊の止宿先であることを家人が認識している返事を戴いたとき、思わず「やつた!」と心中で叫んでしまつたのであった。当時の「五左衛門」家は網元兼名主として羽振りが良く、場所は現在JAの事務所がある所で伊能図の測線の重ね合わせでも一致する場所であった。

「五左衛門」家、正確な屋号「仲の内」は、明治時代にJAに地所を譲り渡し、現在はそこから百五十ほど東の方向に離れた地点にお住まいであった。網元兼名主の風雅を好む家風のDNAを継いでおられるのであろうか、現当主がお住まいの離れの鴨居には「須静庵」という扁額が掲出されており、江戸時代における名主の屋敷の空気が漂つているようであった。忠敬先生はこんな雰囲気のお部屋に泊まつたのだと感慨にふけつていると、何やら物陰から忠敬先生が現れるように錯覚してしまつたのであった。

また、この研究を進める過程で、国土地理院が明治初期の地図を公開していることを知った。それは伊能測量時点から僅か六十年から七十年後の地図であるのだから、その地図を介在させるにより伊能測量隊の足跡研究が一段と進展するものと感じられたのであった(1)。

- 1) 第二次測量追跡記事(房総)
<http://www.inopedia.jp/>
- 2) 大日本沿海実測録
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/900253>
- 3) 日本測地系緯度
<http://www.inopedia.tokyo/gmap/lat/index.html>
- 4) 歴史的農業環境閲覧システム
<http://www.inopedia.tokyo/gmap/lat/index.html>
- 5) 明治初期の低湿地帯
<http://maps.gsi.go.jp/?ls=meijiswale#5/35.362222/1>
38.731389

愛媛県立図書館 久門家文書 解説（一）

解説者 伊藤栄子
記事整理 渡辺一郎
高宮 勲

まえがき

本資料は四国の西条藩領の大庄屋・久門家に伝えられた伊能測量受け入れ計画の記録を翻刻したものである。久門家文書の存在は、古くから知られていたが、その全貌が紹介されるとはなかつた。偶々十数年前に筆者・渡辺が松山市の愛媛県立図書館で伊能測量関係の地元資料を調べていて、原文書を見つけてコピーさせていただいた。色々なイベントに係わつていて、長い間放置してしまつたが、思い出して伊藤栄子さんに翻刻をお願いした。また、高宮夫婦に、協力をお願ひしてようやくまとまつた史料である。

内容的には、日本各地の中でも一番多量の地元史料が残っている愛媛県域のなかでも、詳細に記述されたものと思つてゐる。近隣の村々の対応状況を調べた上で、伊能測量への接遇要領の細部まで具体的に指示した作戦計画書である。愛媛県史で紹介されている近隣の松神子村の記録と共通点が多いが、全貌を活字化した史料はないと思われるので、紹介することとした。地元支援部隊の指揮統制にあたつた村々の指導者は、このような写しを懷中にして作業指示をおこなつていたのである。(渡辺)

一、公儀天文方御役人様御通行之節、諸肝煎
宰領勤書帳 文化五年辰八月 氷見組
安中村組頭 安知生村を早書きの時安中村と當て字にしたか
儀三左衛門

右は途中御昼小休賄肝煎罷出申候	石田庄村屋	伊兵衛
右は氷見村御宿手当肝煎罷出居候得共、西条へ直かニ御通相成御宿相止申候而 右四人之内、	氷見村組頭	文左衛門
伊兵衛、忠兵衛ハ中ノ庄村御宿肝煎罷越申候	同村百姓	忠兵衛
同村組頭	五郎左衛門	
水見村百姓	甚三郎	
(专名は前後の印により変える)	李左衛門	
右は西条御宿用意筆者手当ニ罷出申候	中西分組頭	
西泉村下分庄屋惣	熊藏	
水見組割方	郁右衛門	
右は、かも川喜三右衛門新田御川越肝煎罷出申候	中ノ村組頭	新兵衛
右は梵天組人足引纏、御領分通しニ罷出申候	西田分庄屋	林左衛門
御領分中御付添并西方聞合御用被仰付、心配相 勵申候	中ノ庄村屋	利兵衛
右は御荷物方總肝煎罷出申候	外山村庄屋	
(注 外山村は兎野山村の當て字)	四郎左衛門	

越申候

右之通御座候 巳上

文化六年巳四月

高橋茂左衛門殿

四郎左衛門
利兵衛

合羽

傘

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

勘解由殿持参

駕壱挺四人看板着

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青繩少々

幟三本竿とも

丁縄壱筋

引戸三挺

たれ戸式挺

木履

草履、わらんじ

丁縄壱筋

用意青駄

壱挺式人看板着

引戸式挺

たれ戸式挺
草履、わらんじ
丁縄壱筋
用意床几式脚
右式組へ用意もの
筆紙墨硯箱
菅笠四ツ

火縄
合羽
用意床几四ツ
菅笠五ツ

給仕人四人

合羽
用意青駄

茶道具たばこ盆壺ツ

火縄
合羽
用意青駄

給仕人武人

合羽
用意青駄

茶道具たばこ盆壺ツ</p

御役人御廻浦八八月廿七日西条御入込、同晦
日 西条御出立、東へ御通り

勘解由殿付 人足相印
白紙三黑丸

秀	藏	勘解由殿付	人足相印
伝左衛門	同断白紙二一文字	朱書人足白紙二一文字	白紙二黑丸
貞兵衛			
改五郎			
赤氏黒丸			

秀藏	伝左衛門	同断白紙二一文字	白紙二黒輪違
貞兵衛	政五郎		
勝次郎			
同断赤二字			
		赤紙黒丸	

右持人、大洲辺二而是百五拾人程手当有之由
ニ相聞候得共、是は道筋難所多候
由御当領は道筋も宜候得は、百人位ニ而可然、
御近領之趣ニ隨ひ手當可致事

外
茶道具組仕人壱人
雨覆七島下敷筵傘壱本、下駄草履わらんじ
薄縁等用意之事
一、途中御休小屋 壱番 壱組

但二先ニ御取分リ候時、四組ニ致候ニ

一、宮之下川千汐之節手当人足之事

一、加茂川

一、御本陣川、市塚川 右同断

右之外東筋小川尻手当之事
但 船人用之場所は御用意船相用ひ可
然、船手肝煎之前宏手取り致置可申事

外ニ御見分先ニ而見通シニ障リ候竹木伐リ
除夫、難所道作りとも拾人程諸道具持参候事

但本文人足能相慎無礼ケ間敷儀無之様、且見
分所ニ而着場所之儀御尋有之候は、私共は他村
より罷出候ニ付、当村之儀は不存旨申容易成ル
義不申答様達ニ可申付置事

付紙
本文多喜浜と相認候脇江新田所二
而御座候間（カ）相認可申事
一、前段之通塩浜書出シ運上之儀御尋も有之候
ハゞ、年々出来塩運上ニ而儀ニ付 何程と相答
可申事
但多喜浜ハ定運上東分は儀運上荷候得共、本
文之通り一同儀運上之積りニ相答可申候

右塩浜之儀は村高相認メ候脇江
但本文高内ニ塩浜何軒御座候と相認メ出

可申事

右之通認メ出シ運上之儀御尋も有之候ハゞ、右塩浜之儀は元願出候而高付之田地を塩浜ニ仕立候義ニ而極り之御年貢相納外ニ運上銀は相納メ不申積リニ相心得、若御尋も有之候ハゞ右之趣ニ相答可申事

松神子村
垣生村

右塩浜之儀は村高書出候次江塩浜何軒と認メ出シ、運上之儀御尋も有之候ハゞ、ぬい運上ニ而壹ツニ付何程と有姿ニ可申答

一、寛政二戌年村役人浜師共大坂御番所江披呼登塩浜之儀委ク尋有之節、多喜浜三ヶ所を束多喜浜塩浜数三拾四軒と申達有之由、然ル所此度多喜浜西分塩浜、垣生村、松神子村とうニいたし候ニ付而は、多喜浜塩浜数相減候得共其段は不苦候、若先達而大坂表ニ而申答候とハ浜數柑減候旨之押方有之候ハゞ、右は塩付不宜田地ニ起し申候故、浜数相減候段可申答候

但本文之通申答候上は塩浜田地ニ相成候場所も、浜方申談究メ置可然候

一、松神子村、垣生村揚ヶ浜式拾軒と大坂御番所ニ而申答在之由、右ニ付両村塩浜数相増候儀尋も有之候ハゞ、右は前段申上候御年貢浜之儀は、寛政二戌年大坂表ヘ罷出候後相願塩浜ニ仕立申候儀ニ御座候と可申答

右之外塩仕成等之儀ニ付尋有之候ハゞ、大体先達而大坂表ニ而申答ニ隨ひ猶此度申答之趣ニ都合候様御答可申事

六・禎瑞之儀ニ付心得

海辺之儀荷付大町組、氷見組心得
氷見組

一、禎瑞之儀は先達而申進候通り氷見村、西泉村地先ニ而両村新田畠高之内と相心得可申候

付紙ニ而

氷見村新田畠高千百八拾弐石四斗七升四台西泉村新田畠高四百九石四升八合

但高引わけ口左之通

禎瑞分

一、高千拾壹石六斗

此畝百六拾八町六反 平高六斗

内四百五石三斗 西泉村地先之積り

内百八拾八石六斗七升七台 毛附

弐百拾六石六斗弐升三合 年引

(引には見え難いが年貢免除分)

六百六石三斗 氷見村同断

内五百八拾壹石三斗八合 毛附

弐百四石九斗九升弐合 年引小以

ハヂマセテ

右之通相心得此度御廻浦御役人より尋有之候ハゞ、左之通御答可申事

一、楨江御人込之節、此所何村ニ而高何程と御尋有之候ハゞ、いづれより何方迄水見村分、何れより何れ迄西泉分と両村新田畠之総高を申、右之内ニ而御座候段可申答

一、見江懸り分高何程と前段ニ隨ひ當時毛附高何程と可申答候

二、若高不相応地広杯と御押方も有之候ハゞ毛附高ハ右申上候通りニ御座候得共、年引高何程御座候段前段ニ隨ひ御答可申候

一、若地名御尋有之候ハゞ、右申上候通り両村地先ニ而急度地名と申ニは無御座候得共、此所ハ禎瑞と申來り候と御答可申候

一、万一海辺付村々枝郷等御調ニ付、前方指出帳面之内氷見村、西泉村之部ニ禎瑞と申小名無之杯と御押方も有之候ハゞ、此所之儀は前々は水沾(カ)強ク樂々毛附も無御座候處、役人中段々世話有之候而より追々毛附も御座候ニ付、百姓共も近年迫々出作仕候場所ニ而御座候ニ付、枝郷ニは相立不申儀ニ御座候との趣御答可申事

一、沖手御廻り被成若此所は近來筑立候新田ニ候哉(ママ)と御答も有之候ハゞ、近來ニ筑立候場所ニ而は無御座候、此所は両辺川手ニ而大雨之節大水出、沖手之義も汐深之場所ニ而波当強ク、毎々疼出来仕候ニ付、二十ヶ年已來石等も吟味在之、追々晋請有之當時ニ而はあまり疼も無御座、上手百姓共も安心仕候と御答可申候

(沾(カ)うるおい)

一、御藏之儀御尋も有之候ハゞ、右は上北(カ)手村々藏米船積都合之ため建候中出藏ニ而御座候段御答可申事

一、役所之儀御尋も有之候ハゞ、右申上候通り上手村々藏米中出シ船積等之取扱并西条よりハ川越ニ而大水之節、通路難出来ニ付右等之節居候場所ニ而御座候と御答可申候

一、南蛮樋之事御尋御尋有之候ハゞ、右は御覽披遊候通り南山手より之悪水強ク、其上両辺川

手ニ而大水之節溢水等ニ而沾ひ強ク御座候処、

前方之樋ニ而は吐方悪敷御座候故、段々役人中

世話被致水都合之ため、此所へ所々ニ御座候

樋を取残候儀ニ御座候と御答可申候

但同所番所も樋守小屋百姓家之積リニ相心

得、御尋も御座候ハゞ御答可申事

海辺之儀ニ付大町組

水見組心得

新田分

下島山村

朔日市村

喜多川村

樋之口分

ナガレタ
流田村

右村々海辺付ニ候得共、自今内何等之節海辺付
之村ニ不相立有之候間、古川分境より船屋村境
迄ハ喜多浜分、永易村之海辺と相心得可申候
委敷ハ絵図面之通り

一、右ニ付市塚ハ永易村枝郷と相心得可申事
一、右ニ付明屋敷分漁師共も喜多浜分支配之積
り相心得可申事

七・川々手当

兎野山村

四郎右衛門

中野村

利兵衛

一、宮之下川榜示通り
満汐千汐とも船渡シ 但東手上候場江用意
檀階子(ダンハシゴ)を用候事 汐之模様ニ寄、西
手船乗場為手当左之品々用意

仕立土俵八俵

一、御代島^(ミヨシマ)へ相廻候步行板

式拾枚

船木組

三拾枚

水見組

階子五丁

沢津組

一、御代島へ相廻候步行板

式拾枚

船木組

三拾枚

水見組

一、御代島へ相廻候步行板

式拾枚

船木組

肝煎壹人

御前宿江絵図書上帳持参候村役人

氷見村地所懸り庄屋

同人集

喜多源分庄屋仁

永易村庄屋

船屋村庄屋

候

右之通御座候
辰八月
冰見組
大町組
已上
八の二 新規出来之内御領分中持送り之品書
抜帳

利兵衛写之

一、御朱印台白木三宝 大壱ツ

卷之三 楊州傳錄

一、熨斗台三宝

一、同湯手拭

一、大たらひ

一、一、一

四四四四四八八八四
ツツツツツツツツツツ

座敷刀かけ	四ツ
湯殿刀かけ	四ツ
手水鉢桶	四ツ
杓	四ツ
麻手拭	四ツ
木綿手拭	四ツ
挑灯	四張
但し玄関並門前へ出シ候筋	二ツ
通大町組、氷見組之内ニ而新規二三通り	二ツ
水見村御宿、町御宿、新居浜御宿へ一通	四張
渡候筈	四張
氷見村御宿相済候ハゞ垣生村御宿江相廻	四張
候町御宿相済候ハゞ大島浦御宿へ相	四張
申候新居浜御宿相済候ハゞ蕪崎村御	四張
廻し可申候垣生村御宿相済候ハゞ中ノ	四張
宿へ相廻し可申候	四張
御鑓かけ	四張
信二而有合不見苦候得バ相用候事若無之	四張
苦敷候得バ御宿々ニ而出来之筈	四張
御宿印	四張
之筈	四張
長五間より六間之杉竿氷見村ニて出来	四張
宿印氷見御宿へ相渡し候夫より御宿々	四張
之筈	四張
高繩挑灯	二張
竹之子笠	十枚
備後表薄縁	式拾枚
同二十枚途中用意二持送り、夜分御測	四ツ

一、掛矢 ばんてん	一、さいはり竹 段階子四挺二成ル	一、御休小屋刀かけ 御休所仮用所	一、同所手水提 内式ツ蓋付	一、内式ツ手拭とも、手ぬぐひ立共 杓、手拭とも、手ぬぐひ立共	一、蓮 日傘	一、茶袋 炭人筆	一、蓑笠	一、外ニ武ツハ炭俵入候筈	一、火ばし 火吹竹	一、ふきん	一、炭人筆	一、茶袋	一、日傘	一、蓮	一、御休小屋	一、葛籠	一、内壺ツ足付くミわ 武ツ足無くミわ	一、途中御休小屋 内壺ツ たらひ	一、御朱印台大三宝 内壺ツハ損じ替り 右油紙包外ニ三宝下敷板添	一、御休小屋 内壺ツ たらひ
二ツ	二ツ	二ツ	二ツ	三ツ	八組	五ツ	八ツ	十	七ツ	三ぜん	四ツ	四ツ	四十枚	四十枚	四十枚	四十枚	四十枚	四十枚	四十枚	四十枚
六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本	六本
三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本	三十四本
武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁	武丁

一、荷籠 荷ひかご	一、茶道具入 茶道具入	一、刀かけ 刀かけ	一、たばこ盆 但壺艘へ三ツヅ、	一、ごとく どびん	一、汲茶碗 茶碗	一、茶台 茶台	一、内上 内上	一、内下 下	一、四ツ 四ツ	一、六ツ 六ツ	一、六ツ 六ツ	一、七荷 壺荷	右之分大町組ニ而出来御領分持送り之筈	
一、手たらひ 内麻 木綿	一、手たらひ 内麻 木綿	一、手拭 但蓋付	一、手拭 但蓋付	一、茶水提 茶水提	一、茶碗蓋 茶碗蓋	一、茶台 茶台	一、内上 内上	一、内下 下	一、四ツ 四ツ	一、四ツ 四ツ	一、六ツ 六ツ	一、七荷 壺荷		
二ツ	二ツ	四ツ	四ツ	武本	武本	武本	武本	武本	六ツ	十六	四ツ	六ツ		
四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ	四ツ		
武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ	武ツ		

(褐色は注記と参考)

参考 表紙掲載の伊能図にほぼ対応する範囲の現代図 (国土地理院電子国土に加筆)



伊能忠敬 周辺の人④

平山藤右衛門季忠 前田幸子

はじめに



平山藤右衛門季忠は忠敬が伊能家に婿入りする際に仮親となつた人物である。婿搜しをしていた伊能家に忠敬を推薦し、神保家と伊能家との橋渡しの役をつとめた人物として記憶されている。

先日、『江戸知識人と地図』という本を読んでいると、思いがけなくこの平山藤右衛門が登場した。この本は江戸時代の知識人たちが地図をはじめとするさまざまな物品の蒐集、貸借、交換を通して、博物学的なネットワークを形成していたという文化的な事象について論じている。そのネットワークで交流する知識人の一例としてこの藤右衛門が「伊能忠敬の養父として地図学史にもわずかに顔を出す人物」との解説つきで紹介され、田村藍水や平賀源内が主催する物産会に物品を出品し、同好の士と交流している姿が描き出されている。

これを機会に調べてみると、季忠は単に忠敬を見出しても、忠敬の人生に強く影響を与えた恩人というべき人物であることが分かった。すなわち季忠は忠敬を自らの養子にして林大学頭に入門させ、忠敬に名門平山氏の肩書と、最高学府の学歴を身につけさせた。忠敬の人生において、このことは非常に有利に働いた。

季忠没後も平山家は季忠の孫にあたる平山郡藏・宗平兄弟を測量隊員として随行させるなど、忠敬の事業を支援し続けた。今回は平山藤右衛門季忠の人物像に光をあて、忠敬の人生において平山家が果たした役割の重要性を見直してみたい。

『東海済勝記』の記述

『江戸知識人と地図』の中で藤右衛門が紹介されているのは三浦迂齋という博物家の著書『東海済勝記』という紀行文の中である。三浦迂齋は播州高砂の大庄屋で製塩業や廻船業を営む商人であり、『東海済勝記』は迂齋が宝暦十二年四月から八月に東海、奥羽、北陸を旅した際の紀行文である。迂齋は江戸で平山藤右衛門のほか平賀源内、田村藍水、中川淳庵、山田宗俊らに会い、姫路侯、高田侯、館林侯、出石侯ら諸侯の邸にも伺候している。その迂齋の『東海済勝記』にみえる平山藤右衛門季忠に関する記述は以下のとおりである。

宝暦十二年閏四月十三日（抄）

この夜下総の国中村といふ所にすめる、平山藤右衛門といふ人、予が旅宿えたづねて来らる。此人も此度の会に出会せる人にて、きのふ田村先生

の許にて参会しぬ。此人ハ平山武者所、季重の嫡孫にて、世々将軍家へも拝謁する人也。終夜ものがたりす。昔時將軍頼家公御誕生の時、季重墓目の役つかうまつりしかば、装束の事につき、三浦義盛へ相談ありし事、家記に侍り。然れば某とも世々通家なりとの物がたり也。下総国の産物、海鏡、石鼈などめぐまる。即此度の会に出されし奇物也。

（以下、海鏡、石鼈の説明）此平山氏逗留中、たゞく來とぶらへれつ。和歌などめぐまる。

（以下、長文の詞書、それに続いて和歌）

おもひきや吾妻のはてに住まる身の遠き雲井の玉をみんとへかく申されぬれど、その夜もいたくふけ、事にまぎれて、返しさへせざりし。

【大意】この夜、下総の国の中村という所に住んでいる平山藤右衛門という人が私の旅宿を訪ねて来た。この人もこのたびの物産会に出品した人で、昨日田村（藍水）先生のところでお会いした。この人は平山武者所・季重の嫡孫で、代々將軍家へも拝謁する人である。一晩中語り合つた。「昔、鎌倉將軍頼家の御誕生の時に、平山季重が墓目の役（産所で魔除けをする役）をお勤めした際、装束について三浦義盛に相談したことが家記に書いてある。であるから某とも代々の通家（先祖以来親しく交わってきた家）なのだ」とのお話であった。下総国の産物である海鏡（※貝の一種、ツキヒガイ）、石鼈（※岩石中の粘土状の物質）など下さつた。このたびの物産会に出品された珍しい品である。この平山氏は私の江戸逗留中にたびたび訪れて和歌なども贈つて下さつた。（以下略）

名門の誇り

この『東海済勝記』の記述から、藤右衛門が田村藍水や平賀源内ら一流の博物学者と交流していくことがわかる。なかでも注目されるのは、季忠が平山家の由緒を語り、自らを「世々将軍へも拝謁する人也」と語つたと書かれていることである。藤右衛門は将軍に拝謁したのだろうか。または過去に平山家の当主が拝謁したのか。あるいは、「世が世ならば」代々の当主が将軍家へも拝謁する（ほどの家柄の人）だという意味なのか。いずれにしても平山家が平山季重の血を引く家であること、藤右衛門がその家柄を誇りに思つていたことをこの記述から読みとることができる。また即興に和歌を詠んで贈るなど、「吾妻のはてに住まる身」ながら、相当の教養人だったことがわかる。

名将・平山季重

平山藤右衛門家の祖である平山季重は源平の合戦の際に活躍した名将である。特に源義經率いる一ノ谷の奇襲攻撃で熊谷直実とともに平家軍に突入した勇猛忠節の武将として知られる。源平合戦を脚色した歌舞伎『一谷嫩軍記』には平山武者所の名で登場する。平山氏は平安末期に起こった関東武士団の一つで武藏国多摩郡平山村（東京都日野市）に居館を構え、平山姓を名乗った。季重の子孫が十五世紀の中葉に下総の中村郷に移り住み、郷内の壺岡城に居城したのが中村の平山氏の始めであるといわれる。最後の壺岡城主となつた季邦は徳川家康の招きを避け中村に隠れ帰農した。これが平山藤右衛門家の祖であるという。東京都日野市のかつて平山氏の居館があつた付近は現在平山城址公園となっており、平山城址公園駅の付近には「平山季重遺跡之碑」「季重公靈地碑」、宗印寺の「季重墓」「季重坐像」、季重を祀る「季重神社」があり、近年は地元で「季重まつり」も行なわれている。平山季重は二十一世紀の現在もなお人々に崇敬され存在感を漂わせている武将である。

平山季忠の略歴

平山季忠は宝永七年（一七一〇）、父秀暁の次

宗印寺の平山季重墓

季重坐像



男として誕生した。母は平山一族の理兵衛吉重の女であつた。季忠は「性敏直、学を好み、少時江戸に遊び、聖堂に入り林大学頭に就き」学問を修めたとされる。少年時代、江戸に学んで、幕府の儒官・林鳳谷の薰陶を受け、詩文・和歌に長じ含璧と号した。藤右衛門家は学問を重視し、季忠の家督を継いだ季孝も父同様に林鳳谷に師事したという。延享元年（一七四四）三月、父の秀暁が五六歳で死去したため、当時三六歳であった季忠が家督を相続、以来、郷士・被官として多古藩松平家に仕えるとともに、一方では南中村の名主をつとめた。多忙な名主役のつとめのかたわら、和歌や本草学、博物学にも親しみ、たんなる地方の一教養人の範囲におさまることなく、たびたび出府して同好の士との交流を楽しんでいたようである。田村藍水をはじめとする本草学者や知識人との交流があつたことは前述のとおりである。忠敬の仮親となり、伊能家に婿入りさせたのは宝暦十二年、五二歳のときのことである。安永四年（一七七五）二月に六五歳で死去した。このとき忠敬三十歳。季忠は忠敬より三五歳年長であった。

なお、忠敬が修業時代に平山元徳という人について漢学を学んだという口碑が伝わっている。平山家に伝わっていた文書が火災で焼失したため確認できないが、この元徳という人物が季忠だったのではないかという説もある。季忠の履歴からみて、郷党や親戚の子弟の教育に関わらなかつたといふことは考えにくい。忠敬も何らかの形でこの人物の教えをうけたのではないかと考えられる。

季忠の婿選び

伊能ミチの婿選びは三郎右衛門家の後見人であった分家の伊能豊秋（一七二二—一七七二）が中心となり、宝暦八年から始まった。『伊能豊秋日記』

で、代々お互に嫁を取り合う関係であった。そのため、この三家の家系図を描くとかなり入り組んだ関係となつていて、主なところだけ書き出してみると、平山季忠の妹のタミは伊能家九代目当主長由の妻で伊能ミチの母親、すなわち忠敬にとっては姑、また忠敬の姉フサは季忠のいとこ泰光の妻、季忠の長子季孝の妻は忠敬のいとこ（伯父）神保宗朗の娘の佐緒（泰光の妻）、という関係であった。このようないい縁故から、伊能家の後見人であつた伊能豊秋は、はじめ平山季忠の三人の息子のうちから婿を一人出してもらうことを希望した。しかし宗教上の理由から、それは叶わなかつたといわれる。

南中村近辺は日蓮宗の檀林（僧侶の学校）をもつ古刹・日本寺を中心に日蓮宗が盛んな土地柄であった。平山家も日蓮宗の熱心な信者であつたと伝えられ、その家で育つたタミは伊能家に嫁いでも真言宗に改宗せず、かえつて伊能家の女性たちに日蓮宗を熱心に広めようとしたため伊能家の怒りを買い、長由の死を機会に、幼いミチとともに実家に帰されたといわれる。季忠が夫に死なれた妹タミと、まだ幼い一人娘ミチを家に引き取り、十数年間この母子を預かつたことは知られているが、その事情はこのような宗教上の理由であった。伊能豊秋は季忠に平山家中から婿を迎えていた交渉したが、婿入りに際しては伊能家の宗派である真言宗への改宗を条件としたため、季忠に拒否されたのだといわれる。

日蓮宗と平山家

平山家、神保家、伊能家の三家はいずれも旧家

によれば、豊秋の奔走にも関わらず、思うように婚選びが進まなかつたが、宝暦十二年の後半になつて事態が急展開、神保家の忠敬（当時は三治郎）が婿入りすることになった。下記に年表風にまとめてみたが、経過が急展開した様子がわかる。宝暦八年から四年間は進捗がないが、宝暦十二年に発化し、九月からの三ヶ月で婚礼までどんどん拍子に進んだ。この宝暦十二年は季忠が江戸の物産会で三浦迂斎を訪ねた年である。八月には別の候補者を年が若すぎるという理由で断つているから、忠敬はこの時期までは婚選びの射程に入つていなかつた。ところが夏に、坂田郷の土地改良工事があり忠敬を手伝わせたところ、人使いの才能があることを見出されて一気に有力候補になつた。手伝いを頼んだのだから季忠は忠敬を知つてはずである。しかし、忠敬が落ち着きのない性格なので名門伊能家の婚候補には入つていなかつたのだろう。このあと九月廿四日には「神保三次郎と申仁へ取掛る積り」となり、一族の中でも重鎮であった季忠の推挙は力を持っていたためか、とんとん拍子に事がすんでその年の内に婚礼となつた。忠敬当人としては、わずか三ヶ月の間に平山家の養子となる積り」であり、一族の中でも重鎮であった季忠の推挙は力を持っていたためか、とんとん拍子に事がすんでその年の内に婚礼となつた。忠敬当人としては、わずか三ヶ月の間に平山家の養子となり、林大学頭に入門し、伊能家の養子として年上の子持ちの未亡人と婚礼、と矢継ぎ早に人生が展開したわけである。忠敬青年の心情はどういうものであつただろうか。これらが本人の意思とは無関係に進められたであろうことは、後年、娘の妙薰に宛てた書簡で「我等幼年より高名出世を好み候得共、親の命にて佐原え養子となり候間、好る所の学文も止め」と、やや恨みがましい語調で述べていることからも推察される。

平山家の仮養子

伊能、神保、平山の三家はお互いに嫁を取り合ふといずれも地元で有力な家であつたが、神保家と伊能家との間には多少の格差があつたため、忠敬

『伊能豊秋日記』より一婿選びの経過

宝暦七年（一七五七） 伊能景茂（ミチの夫）死去
宝暦八年（一七五八） 婿探し開始
 （伊能豊秋婿探しに尽力するも宗教上の問題あり）

宝暦十二年（一七六二）

正月廿一日 三郎右衛門家、豊秋に養子の件依頼
 廿四日 豊秋、藤右衛門へ養子の件で相談

廿六日 相談結果を三郎右衛門家へ報告
 豊秋用務で出府（三ヶ月滞在）

永沢次郎右衛門と会談

廿七日 伊能家から養子の件で飛脚来る

三月五日 伊能家より豊秋旅宿に酒二樽届く

四月十三日 平山藤右衛門、三浦迂斎を訪ねる

四月廿六日 豊秋、中村に平山藤右衛門を見舞う

六月十八日 豊秋、出府中の平山藤右衛門と相談

八月三日 平山藤右衛門佐原の伊能家に来る

坂田郷土地改良事業 佐忠太を推薦

九月廿四日 神保三次郎と申仁へ取掛る積り

十月廿三日 中村藤右衛門、養子の儀に付見舞う

十一月五日 林家へ入門 平山家養子 名乗書

十一月廿九日 入夫決定 仲人平右衛門

十二月一日 藤右衛門、婚礼日程打合せに来る

七日 銚子より座頭見舞に来る

九日 婚礼の振舞い 観福寺墓参 親戚挨拶

林大学頭への入門

季忠は若い時から林大学頭の門人であつた。学問好きでもあつたが、学歴の重要性も認識してい

は伊能家への入夫に際し一旦平山家の養子になつたといわれる。忠敬が文化五年に幕府に提出した親類書にその三家の格差が表われていると思うので次に掲げる。親類書では、養方の伊能家、平山家とも姓が記してあるが、実方は祖母の古河氏を除いて姓が記されていない。正式に姓を名乗ることをゆるされていなかつたためと思われる。

【親類書】文化五年一月十九日提出『江戸日記』

實方		養方	
一、祖父	下總国香取郡佐原村百姓	伊能勘解由死	
一、祖母	同断	權之丞死	娘死
一、父	同断	伊能三郎右衛門死	
一、母	下總国香取郡佐原村百姓	平山藤右衛門死妹死	
一、母	同断	伊能三郎右衛門死	
一、父	同断	伊能三郎右衛門死	
一、母	同國同郡中村百姓	平山藤右衛門死妹死	
一、母	同國同郡中村百姓	伊能三郎右衛門死	
一、孫	三郎右衛門実子總領	伊能三次郎	
一、母	同國同郡中村百姓	利右衛門死	
一、母	同國同郡中村百姓	利左衛門死	
一、母	同國同郡中村百姓	五郎左衛門娘死	
一、母	同國同郡中村百姓	利左衛門	
一、甥	同國武射郡小堤村百姓	利左衛門娘死	
一、甥	同國武射郡小堤村百姓	利左衛門	
右之外	親類無御座候	以上	
	文化四年十二月	伊能勘解由	
	花押		

たのだろう。入夫に際し、格をつけるため忠敬を自らの第四子として林大学頭鳳谷に入門させた。

林大学頭の塾入門者の控え『升堂記』によれば、

「宝暦十二年壬午 十一月五日入門

父平山藤右衛門口入

平山左忠次
改伊能三郎右衛門」

とあり、伊能家の『旗門金鏡類録』には、

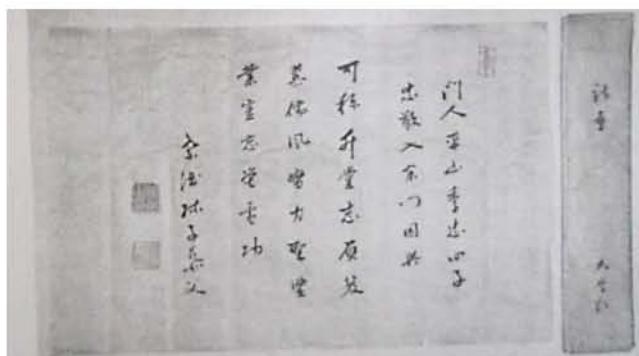
「同十二年午年十一月 貞恒ノ男某 平山季忠
也称藤右衛門」介メ 御先代鳳谷公へ入門シ 実名忠

敬ト賜ハル」

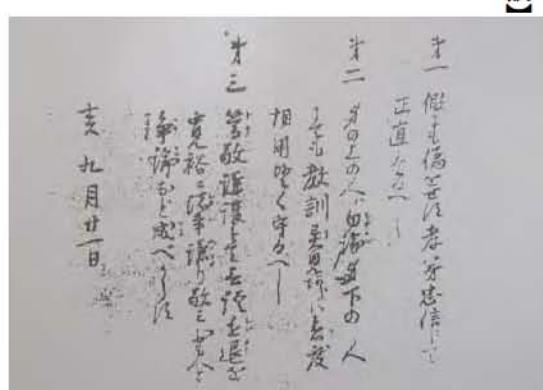
と記載されているという。

【林大学頭詩】（世田谷伊能家藏）

詩章	大學頭
門人平山季忠四子	
忠敬入余門因與	
可稱升堂志負笈	
慕儒風努力聖賢	
業豈忘螢雪功	
祭酒 林子恭父	



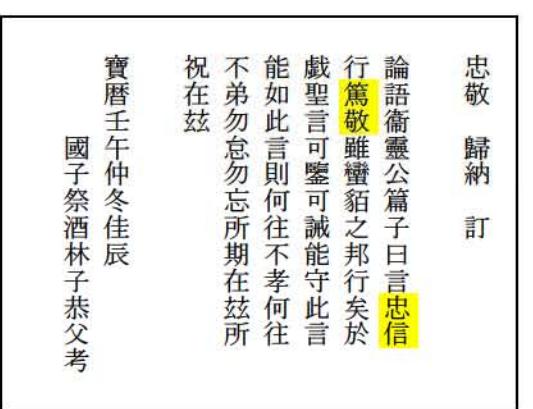
【伊能家家訓】



【伊能忠敬名乗】（伊能忠敬記念館蔵）

忠敬	歸納	訂
名乗	從五位下守大學頭	

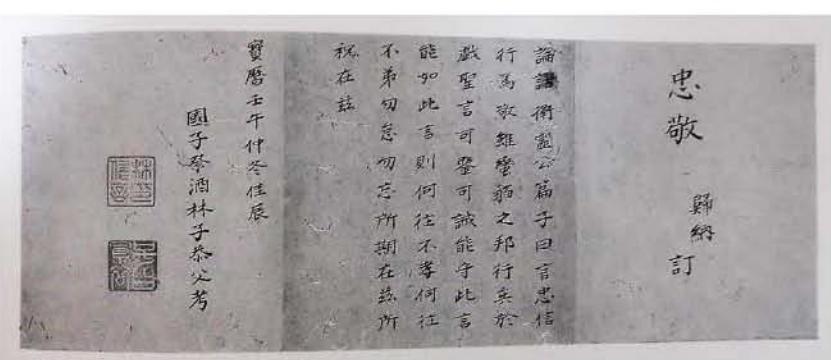
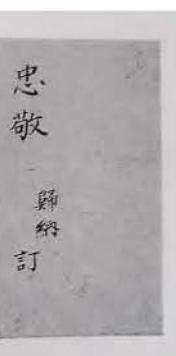
伊能三郎右衛門殿



第一假にも偽をせず孝弟忠信ニして正直たるへし
第二身の上の人に勿論身下の人にも教訓異見
(※意見)あらハ急度相用堅く守るべし
第三篤敬、謙讓もて言語進退を寛裕ニ、諸事謙り
敬ミ少も人と争論など成べからず

亥 九月廿一日

（世田谷伊能家蔵）



林大学頭は季忠の名前の忠の字にちなみ、忠が含まれた章句を選んで「忠敬」と命名したと考えられる。忠敬はこの名前を署名するたびに、誇らしい思いをしたのではないだろうか。

大谷亮吉『伊能忠敬』には、このとき林大学頭から与えられた詩文と名乗書は「当時もっとも尊重せられたるもの」と記されている。

林大学頭の門人になったことは、当時として最高学府の学歴を身につけたことでもあった。忠敬が蝦夷測量に際しての幕府高官との応対も気後れずにできたのもこの学歴あってのことではなかつたか。忠敬の入門の費用も季忠が出したと思われるが、これら婿入りに要した費用は平山家の大きな負担となつたと語り継がれているという。ちなみに江戸日記には孫の忠誨が林大学頭に入門した際の費用として内金三百疋と入門金二朱を支出したと記録されている。ある資料によれば、広瀬淡窓（一七八二～一八五六）の咸宜園は入学

参考 論語

【原文】子張問行、子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉、立則見其參於前也、大然後行也、子張書諸紳

【訳文】子張が「思いどおり」行われるにはとおたずねした。先生はいわれた、「ことばにまごころがあり、行いがねんごろであれば、野蛮な外国でさえ行われる。ことばにまごころがなく、行いも行われようか。立っているときにはそのこと「まごころとねんごろ」が前にやつてくるように見え、車に乗つているときにはそのことが車の前の横木によりかかっているように見える、まあそのようになつてはじめて行われるのだ。」子張はそのことばを「忘れないように」広帯のはしに書きつけた。

（岩波文庫『論語』衛靈公第十五 金谷治訳注）

金が百疋、年二回の授業料が各百疋だったというから、これに比べると林家の学費は高額である。なお『香取郡誌』には出府する季忠に随伴して忠敬も林家を訪れたと記されている。たとえ形だけにせよ入門するからには、やはり林家の門をくぐり林鳳谷から直々に名乗書を受け取つただろう。『江戸日記』には隠居後も年始、寒中見舞を欠かさず、兎一双を贈るなど、林家への礼儀を欠かさなかつた忠敬の姿が見える。忠敬は入門させてくれた季忠の配慮に生涯感謝したことと思われる。

名乗書と家訓

季忠が世話を実現した林大学頭への入門ではあつたが、実際には家業に忙殺され、実際に勉學に通うことができなかつた。しかし、この入門と実名をいただいたことが、このあとの忠敬の人生に影響を及ぼしたと思われる。その一例として、林大学頭にいただいた名乗書の字句が伊能家家訓

参考 伊能忠敬家訓

口語文

一、決して嘘をついたりだましたりせず、親には孝行、兄には従順、忠義、誠実にして正直であること。
一、目上の人は勿論、目下の人でも教訓となる意見があれば必ず取り入れて役立てること。
一、篤く敬う気持ちと謙讓の心をもつて、言葉や立ち居振る舞いを広やかにゆつたりさせ、諸事へりくだり慎み、決して人と論争などしないこと。

亥年（寛政三年）九月二十一日

にそのまま使われていることを挙げたい。

名乗書によれば、「忠敬」という実名は論語の衛靈公篇の「忠信」「篤敬」が出典となっているが、忠敬はこの二語をそのまま伊能家の家訓の中に取り入れているのである。このことは從来指摘されていなかつたが、十七歳当時に頂いた名乗書の語句を、寛政三年（一七九一）四十七歳のときに景敬に与えたといわれる「家訓」の中にそのまま取り入れていることから、林大学頭の門人であること、またその際に賜つた「忠敬」という実名が忠敬の生涯にわたる精神的支柱となつていたのではないかと推測されるのである。

全国測量と平山家の兄弟

平山家の忠敬への支援はこれだけではなかつた。季忠の息子で家督をついだ平山季孝は、忠敬より五歳ほど年上であったが、佐原時代の忠敬と兄弟のように交流し、ともに信頼・尊敬する間柄であったと言われる。天明八年（一七八八）七月に季孝は四九歳の若さで他界するが、父の死後、その子の郡蔵（季恭）と宗平（将季）の兄弟は、忠敬の全国測量に随伴して大いに活躍する『香取郡誌』には、郡蔵について「平山季恭は弱若の時、久保木清淵に師事し、研鑽数年後、忠敬に従ひ心を数理に注し、測量・針緯の術に精しく、忠敬の官命を帶び各地を巡るや、特に行に隨ひ、沿岸測量の製図に従事して（中略）、大いに其事業を助成す。」とある。また宗平については「平山将季は忠敬に師事して、共に測量に従事す。其蝦夷地測量に至ては、概ね將季の力に頼れりと。」と記されている。平山兄弟の伊能測量における活躍は『測量日記』で実感することが出来るが、まず、第一次測量に

は弟の宗平が参加した。最初の測量行で蝦夷地まで難儀な旅だったが、宗平は若年ながらよくその任務を果たしたようである。一次、二次の測量に従事した後、銚子の信田家の養子となつたため、以後は測量日記には現われていない。

伊能測量における平山兄弟の働きは大きく、そのためには平山家は経済的に衰退したとされ、布留川氏から嫁いだ季恭（郡藏）未亡人の奮闘・活躍ぶりが今日まで伝えられている。という。

平山郡藏と第五次測量

平山郡藏は父季孝亡きあと、家督を相続して平山藤右衛門を名乗つた。第二次測量から忠敬に随行し、以後測量の知識と経験を重ね、抜群のリーダーシップを發揮して忠敬の片腕となつて活躍した。第二次以降第五次までの全国測量に従事したが、第五次測量の際に天文方下役の市野金助と確執があり、規律に乱れが生じたとして破門されたことは周知のことである。この処分が一方的に過ぎたことは、郡藏にあてた間重富の書簡によつても知られる。郡藏を破門させたことについての忠敬の詫び状が、平山家に残されていたが火災で焼失したといわれる。破門から十年後、全国図の最終版を作成中、忠敬は破門中の郡藏を呼び戻して地図制作に従事させた。人手不足で仕事がはかどらなかっためだが、郡藏が當時大困窮していたからでもあつた。幕府に遠慮して平山を平野と名前を変えて採用したが、忠敬死去の翌年、文政二年（一八一九）十月、四二歳の若さで他界した。

御手洗測量図

この絵図は文化三年三月三日、忠敬率いる本隊

の御手洗付近における測量風景を、平山郡藏が地元に命じて描かせたものである。この絵図の下部分に「平山郡藏から御本陣亭主柴屋政助への仰付けにより描かせ、伊能隊に差上げた」旨の書付があり、地元の費用だとわかる。郡藏の強力な采配ぶりが感じられる。本陣の建物と庭園、美しい瀬戸内の風景、幕府事業となつた伊能隊の堂々たる測量ぶりが郡藏の絵心を刺激したのだろうか。素晴らしい絵画となつていて、資料的価値もあり貴重である。付箋がついていて、資料的価値もあり貴重である。なお伊能隊に献呈された原図は現存しない。



『御手洗測量図』 吳市教育委員会蔵

【参考文献】

- 『江戸知識人と地図』 上杉和央 京都大学学術出版会
『伊能忠敬』 大谷亮吉 岩波書店
『香取郡誌』 千葉県香取郡役所編輯発行
『新説・伊能忠敬』 佐久間達夫 編著 発行
『伊能忠敬研究』 第14号 伊能陽子 伊能研究会
『伊能忠敬研究』 第19号 21・31号 小島一仁
『伊能忠敬研究』 第47号 宮内敏
『伊能忠敬研究』 第54号 佐久間達夫

平山家の菩提寺は多古町北中の日蓮宗の古刹・法性山淨妙寺である。平山家は淨妙寺の檀頭（檀家の中の代表）をつとめ、住職も出していた家である。境内には歴代住職と平山家の墓塔が並んでいる。平山家の墓所は多古町南中の日本寺に隣接する墓地の一角にある。季忠の墓は特定できない。周

知の通りここには忠敬夫妻の墓がある。季忠の第四子としての待遇であろうか。平山家にはイネ夫妻の墓と過去帳もあるという。イネは夫の死後、淨妙寺で剃髪し、戒名「華香院妙薰日明」を授かり「妙薰」と称した。観福寺にも墓があり、「楞嚴院臥常妙実大姉」という戒名もあるが、イネはおそらく日蓮宗の信者だったのだろう。平山家との強い絆を示す逸話ではないだろうか。（了）



淨妙寺にある平山家の墓塔群（左列）



日本寺に隣接する平山家の墓所
左奥の大きな墓の後ろが忠敬夫妻の墓

江戸幕府日記を読む②

『日本東半部沿海地図』上覧

前田幸子

文化元年九月六日

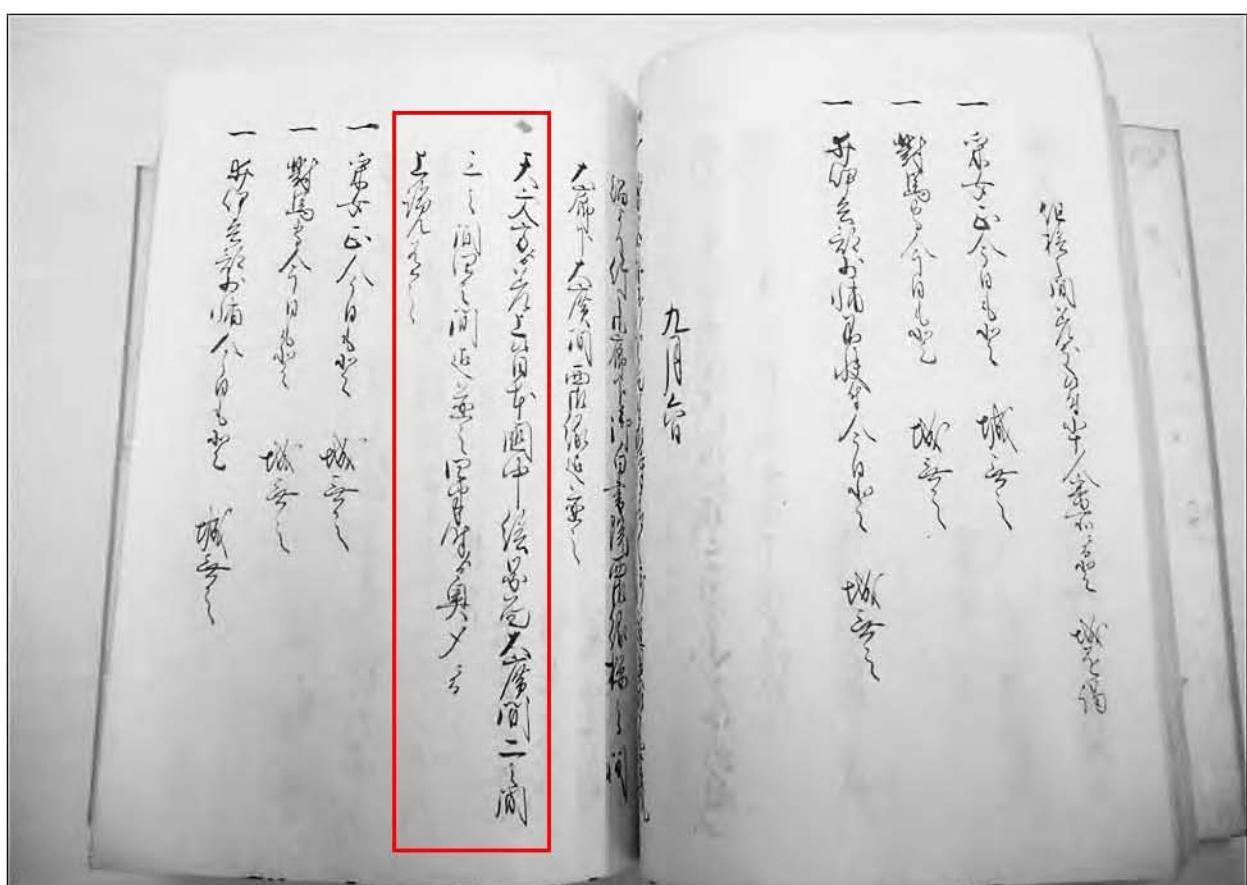
天文方より差し上候日本國中繪圖面大広間二之間

三之間四之間迄並之四半時より奥メニ而

上覧有之

【備考】第一次から第四次までの測量結果は『日本東半部沿海地図』大図六九枚、中図三枚、小図一枚に仕立てられ、文化元年八月に天文方が幕府に提出、九月六日に將軍家斉の上覧に供された。『江戸幕府日記』には「天文方より差し上げた日本地図を大広間に並べて四半時（※午前十一時頃）から奥へにして上覧があつた」と記されている。五〇〇畳ほどもあつたといわれる大広間に彩色地図が並ぶ光景は壯觀だつただろう。九月十日には忠敬に幕吏登用の辞令が下りた。

なお、『続徳川実紀』には、この將軍上覧の記事の翌七日付でレザノフ来航の記事が載つており、伊能測量事業推進の背景にあつた対外情勢の緊迫感が伝わつてくる。



『続徳川実紀』—文恭院殿御実紀卷三十七—

文化元年九月

○六日天文方より呈せし日本國中繪図外殿へ臨せられて觀給ふ。

【家斎覧天文方呈上日本国中絵図】

○七日此日魯西亞船一艘肥前長崎神の島に船掛りのよし。其所の奉行肥田豊後守頼常より注進ありしかば。目付遠山金四郎景晋をつかはされ。速に帰国すべしと諭告せらる。【露国使節レザノフ来航】

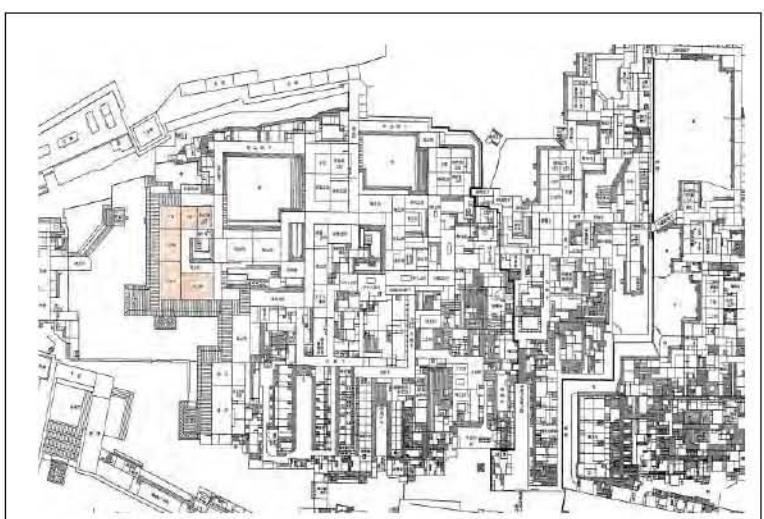
【江戸幕府日記】

「江戸幕府の諸役所で公務の内容を記録した日記類の便宜的な総称。代表的なものは『御用部屋日記』と本丸および西ノ丸の『右筆日記』である。現在、江戸幕府日記は内閣文庫に最も多く保存されている。同文庫所蔵の幕府日記は二千数百冊にのぼるが、その中には種類・系統・年代のまちまちな各種の日記が含まれている。そのうち最も著名な一群は『柳営日次記』の内題をもつ七百七十一冊の本で、その外題は単に『年録』と題する。」吉川弘文館『国史大辞典』（抄）

※本稿の江戸幕府日記は国立公文書館・内閣文庫所蔵のものに拠った。

【徳川実紀】

「初代徳川家康より第十代家治までの江戸幕府将軍の事歴を中心に叙述した史書。第十一代家斉から第十五代慶喜までは『続徳川実紀』と通称されている。江戸幕府撰。」吉川弘文館『国史大辞典』(抄)
※本稿の続徳川実紀は吉川弘文館『新訂増補国史大系』「続徳川実紀」第一篇から抄出した。なお、旧字体を新字体にあらためた。



上：「江戸城本丸表・中奥・大奥図」
(吉川弘文館『国史大辞典』)

左：大広間部分の拡大図

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

一各地の記念碑・標柱等紹介（六）—

二〇一三年秋より、全国の市町村（『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地）に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいてきました。厚くお礼を申し上げます。八月半ばから九州に入りましたが、九州内陸部の測線が複雑で、当方の頭も複雑に混乱しています。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に隨時紹介することにしました。旅行や仕事で現地にお出掛けの節は、是非とも訪ねてみてください。

一、広島県神石郡神石高原町

神石高原町は広島県の東部に位置し岡山県と接しています。中国山地が南に張り出した高原地形の中にある、標高は四〇〇～五〇〇mです。国の名勝に指定されている帝釈峡は「仙境の里」神石高原町を代表する景勝地です。

享保二年から幕末までの百五十年間、神石郡は幕府領と豊前中津藩（現大分県中津市）領に分割統治され、神石郡三七カ村中二二カ村が中津藩領でした。

嘉永五年以降幾多の変遷をへて、昭和三四年に油木町、神石町、豊松村、三和町の四町村体制となりましたが、平成十六年十一月五日、四町村が合併して神石高原町が誕生しました。

（神石高原町ホームページ等）

- (1) ①名称 石碑「伊能忠敬測量之地」
 ②説明文
 (左側面) 「伊能忠敬の功績」



神石高原ホテルの敷地内に設置された石碑

完成の基を築いた。

（右側面）「神石の足跡」【原文訳】（省略）
 （裏面）「神石の足跡図（省略） 神石郡内の測量

隊の行程を矢印で示した略図」

③設置場所 神石高原町時安 5090

④設置年月日 平成十六年（2004）十一月五日

⑤設置者 伊能忠敬測量の地碑建設委員会

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬の偉大な業績を称え、永く後世に伝承して地域活性化に寄与することを目的に、町村合併事業として碑を建立する

⑦見学の可否 随時可能

追記：今年六月、長野県の会員市川美津夫さんから、この石碑の写真を頂戴していました。伊能ウオーク仲間の神田光昭さんがたまたま神石高原ホテルで行われた姪御さんの結婚式に参列していて発見されたそうです。「伊能ウオークに参加していないかつたら見過ごしていたかも知れません。何か

の縁を感じました。」とメールに書かれていました。
神田さん撮影の石碑側面と裏面の写真を紹介します。



(上) 左側面「神石の足跡」

(左) 裏面「人跡の足跡図」

- (2)
- ①名称 石碑「伊能忠敬測量隊宿泊邸跡」
- ②碑文 「文化八年（一八一一）二月十日支隊泊
文化八年（一八一一）二月十五日本隊泊
- 庄屋 七郎左衛門邸宿泊
神石高原町合併記念
夜天体観測



(三輪酒造ホームページより)

約三百年続く三輪酒造の門前に
設置された記念碑



- 平成十六年（二〇〇四）十一月五日
- 伊能忠敬測量の地碑建設委員会
- ③設置場所 神石高原町油木乙 1930 三輪酒造前
- ④設置年月日 （1）に同じ
- ⑤設置者 （1）に同じ
- ⑥設置の背景・経緯 （1）に同じ
- ⑦見学の可否 隨時可能



今は笹藪となった「庄屋 矢
田貝孫兵衛」家跡の記念碑



- 平成十六年（二〇〇四）十一月五日
- 伊能忠敬測量の地碑建設委員会
- ③設置場所 神石高原町豊松中平
- ④設置年月日 （1）に同じ
- ⑤設置者 （1）に同じ
- ⑥設置の背景・経緯 （1）に同じ
- ⑦見学の可否 隨時可能

- 平成十六年（二〇〇四）十一月五日
- 庄屋 矢田貝孫兵衛 正都邸
神石高原町合併記念
- 文政三年（一八二〇）享年五四歳没

(4)

- ①名称 石碑「伊能忠敬測量本隊宿泊邸跡」
 ②碑文 「文化八年（一八一—）二月十四日泊
 夜天体観測

年寄 門田久治良翁邸（寄定屋敷）
 文政四年（一八二—）四月忠敬一行宿泊
 十年後没

神石高原町合併記念

平成十六年（一〇〇四）十一月五日

伊能忠敬測量の地碑建設委員会

- ③設置場所 神石高原町下井関
 ④設置年月日 （1）に同じ
 ⑤設置者 （1）に同じ
 ⑥設置の背景・経緯 （1）に同じ
 ⑦見学の可否 隨時可能



旧門田家跡地に設置された記念碑

（広島県神石高原町生涯学習課提供）

二、島根県雲南市

雲南市は、島根県の東部に位置し、南部は広島県に接しています。南部の中国山地から北部の出雲平野まで標高差が大きく、市内には、ヤマタノオロチ伝説で知られる斐伊川が流れ、各地に神話や伝説、神楽などが伝承されています。また、一ヵ所からの出土例としては日本最多となる三十九個の銅鐸が発見された加茂岩倉遺跡が知られています。

古くから斐伊川の支流周辺の低地では農耕が営まれ、山間地ではたら製鉄や炭焼きが盛んに行われてきました。また、山陰と山陽を結ぶ主要街道上に位置することから、陰陽を結ぶ交通の要衝として栄えてきました。

平成十六年十一月一日、八つの町村が合併して雲南市が誕生し、若者や市民がいきいきと課題解決にチャレンジするまちづくりを進めています。
 （雲南市ホームページ等）

⑦見学の可否 隨時可能

- ③設置場所 雲南市木次町東日登1345
 大森神社境内



神社本殿前から木次町東日登地区と寺領地区の家並みを望む

石碑は鳥居の右の杉木立の前にある。
 大森神社

- ④設置年月日 平成十六年三月
 ⑤設置者 大森神社氏子一同
 ⑥設置の背景・経緯 不明



大森神社の参道

について『測量日記』には、「東日登村・字一ノ段一町斗引込左 大森大明神ノ社」と記されている。



「測量隊一行
ここを罷り通る」の石碑

(雲南省教育委員会社会教育課提供)

※木次町八日市には「浪花の大松」と呼ばれる、樹齢四五〇年、高さ十一m、幹周り周囲二・八mの大松がある。左へ九m、右へ十六mの枝を屋根の上に伸ばしている。かつてこの家が測量隊の宿所土屋半十郎家だった。明治に入つて今の酒屋・浪花家の所有となり、「浪花の大松」と呼ばれるようになつたらしい。伊能忠敬も見た大松である。(「浪花の大松」でネット検索してみてください。)

文化十年(一八一三)十一月二十四日の『測量日記』には、木次町八日市の土屋半十郎宅に宿泊。「家作よし一軒済」とあり、部屋数が多く分宿する必要がなかつたようだ。この大松の枝ぶりを見れば合点できる。

三、島根県仁多郡奥出雲町

奥出雲町は、島根県の東南端に位置し、中国山地の嶺をへだて広島県と鳥取県に接する、神話に名高い斐伊川の源流域にあります。この地は、「古事記」、「日本書紀」の八岐大蛇(ヤ

マタノオロチ)退治や、素戔鳴尊(スサノオノミコト)が降臨したと伝えられる出雲神話発祥の地です。また、古くから「たらら」製鉄で栄え、今でも世界で唯一、古来からの「たらら」操業を行ない日本刀の原料となる玉鋼(タマハガネ)を生産しています。

平成十七年三月、旧仁多町と旧横田町の合併により誕生しました。(奥出雲町ホームページ等)

- ①名称 木柱「伊能忠敬測量地点」
- ②碑文

(表)「伊能忠敬測量地点」
(裏)「東經一三五度五五分 北緯三五度一分」



測量隊が宿泊した塗屋(長瀬氏宅)



式内 三澤神社

(左側面)「文化十年十一月二十三日(一八一三)」

- ③設置場所 奥出雲町三沢 102 三澤神社の中参道左側
- ④設置年月日 平成十四年
- ⑤設置者 三澤神社
- ⑥設置の背景 奥出雲町に残る文書から、伊能忠敬が三澤神社まで測量したことを知り、参拝者や町の人々にも知つてほしいと思い、標柱を設置。神社には記録なし。
- ⑦見学の可否 隨時可能

『測量日記』には、式内三澤神社の社前まで測り打ち止めにしたこと、祭神・祭日・神主名を記している。参道には、忠敬たちも見たであろう樹

齡二四〇年とされる大杉がそびえ立っている。文化十年（一八一三）十一月二十三日、測量隊は三澤神社のすぐ近くの塗屋祐左衛門宅に宿泊し、天文測量をおこなった。塗屋は代々松江藩の下郡役（したごおりやく他藩の大庄屋）を勤めた家柄である。現在は、大正期に建てられた家に、子孫の長瀬氏（塗屋は屋号）がお住まいである。

前日の十一月二十二日、測量隊は上阿井村延谷（呑谷か？現在の奥出雲町上阿井）の可部屋勘左衛門宅に昼休、同村阿井町の可部屋勝太郎宅に宿泊した。宿所の勝太郎家は「一軒にて済む」と記されていて、部屋数が多い大家だったようだ。昼休の勘左衛門宅は「鉄師大家」とあり、代々松江藩の「鉄師頭取役」を務め、製鉄業の発展に尽くした。藩主松平不昧公が度々訪れている。享和三



あとがき

今回は三市町の記念碑を紹介しました。広島県神石高原町の四基は以前からよく知られていたものですが、島根県雲南市と奥出雲町は初めて会報に登場します。原稿の締切日直前に届いたり、偶然ネット上で発見したものです。神石高原町と雲南市、奥出雲町の担当者様には現地へ出かけて撮影していただき、本当に有り難く、感謝申し上げます。木柱を建てられた三澤神社宮司陶山親敏様にもお世話になりました。ありがとうございます。

元会員の松井義典さんの気概には、大いに学ぶところがありました。会報五四号一ページの「史跡探訪」、八〇一五ページ記事を是非ご覧ください。

松井さんの先祖で測量隊の供侍だった松井沢次、榎本武揚の父箱田良助、神辺の本陣に忠敬を訪ねた菅茶山のことなども記されていて、大変興味深い報告となっています。

「伊能忠敬たちが来た！」という驚き・感動が原動力となって、伊能図の測線上に無数の記念碑・案内板が建てられても不思議ではありません。

でも、想像すると嬉しいような、怖いような……

（没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代）

年（一八〇三）に造られた庭園が、現在、可部屋集成館の櫻井家住宅で公開されている。伊能忠敬一行も見たはずの庭園である。

忠敬先生の没月日について

前田 幸子

昨年四月十三日のことである。この日は忠敬

先生の命日なので上野の源空寺に出かけた。お墓にお参りしたあと、何気なく墓前の説明板を読むと、忠敬は「文政元年（一八一八）四月十八日没す」と書いてある。四月十八日？はて忠敬先生は四月十三日、今日が命日のはずだが……きつねにつままれたような思いで帰宅し、手元の資料を調べてみると、大谷亮吉『伊能忠敬』をはじめ、どの資料も「四月十三日（新暦五月十七日）没」と明記してある。説明板の「四月十八日没」という日付は何に拠ったのか。設置者である台東区教育委員会に問合させてみた。すると「源空寺の説明板は平成七年三月に設置したもので説明文の原稿はありますが、どのような資料に基づいたかは確認できません。台東区の中央図書館が所蔵している以下の『人名事典』を参考にしたかもしれません。」として、岩波書店『国書人名辞典』、平凡社『日本人名事典』、吉川弘文館『国史大辞典』を挙げた。そこで図書館に行つて人名事典類を調べてみると、驚いたことに全て「四月十八日没」と書かれている。これほど著名な歴史上の人物の没年月日が、なぜこんなことになっているのか。

各出版社は一体どのような資料に基づいて「四月十八日没」としたのか。出版年が最も早い、『国史大辞典』の吉川弘文館に問合せた。伊能忠敬の項の執筆者は大矢真一先生ですが四月十八日没の根拠は不明です。お調べして

伊能忠敬墓（国指定史跡）

台東区東上野六丁目十九番
源空寺墓地内

墓石は角石で、正面に「東河伊能先生之墓」と揮書で刻む。忠敬は延享二年（一七四五）神保良恒の子として上総国に生まれる。名を三治郎といつて、のち上総國佐原の酒造家名主の伊能家を継ぐ。名を忠敬と改め伊能家の家業經營に精進する。数学、測量、天文などを研究。漢詩、狂句も良くし、子斎と字し、東河と号す。

五十歳の時、家督を譲り江戸に出て、高橋至時の門に着手。以来十八年間、全国各地を測量して歩いた。しかし地図未完のうちに文政九年（一八一六）四月十九日没す。享年七十四歳。

地図作製は、幕府天文方が引き離き、没後三年の文政四年に完成。その地図は「大日本沿海輿地全圖」という。また「日本輿地全圖」「実測輿地全圖」ともい。俗に「伊能図」と呼ぶ。我が国最初の大測量地図である。

平成七年三月

台東区教育委員会

TOMB OF INO TADATAKA

上野源空寺の「伊能忠敬墓」説明版

五十年代の時、家督を譲り江戸に出て、高橋至時の門に入り、西洋暦法・測図法を学ぶ。寛政十二年（一八〇〇）幕府に願い出て、蝦夷地（現、北海道）東南海岸の測量に着手。以来十八年間、全国各地を測量して歩いた。しかし地図未完のうちに文政九年（一八一六）四月十九日没す。享年七十四歳。

地図作製は、幕府天文方が引き離き、没後三年の文政四年に完成。その地図は「大日本沿海輿地全圖」という。また「日本輿地全圖」「実測輿地全圖」ともい。俗に「伊能図」と呼ぶ。わが国最初の大測量地図である。

五十年代の時、家督を譲り江戸に出て、高橋至時の門に入り、西洋暦法・測図法を学ぶ。寛政十二年（一八〇〇）幕府に願い出て、蝦夷地（現、北海道）東南海岸の測量に着手。以来十八年間、全国各地を測量して歩いた。しかし地図未完のうちに文政九年（一八一六）四月十九日没す。享年七十四歳。

地図作製は、幕府天文方が引き離き、没後三年の文政四年に完成。その地図は「大日本沿海輿地全圖」という。また「日本輿地全圖」「実測輿地全圖」ともい。俗に「伊能図」と呼ぶ。わが国最初の大測量地図である。



後日連絡します。」後日連絡があつたが、「日付の根拠はわかりませんでした。ご指摘は記録として保管して今後の参考にさせていただきます。」とのこと。この大辞典は参考文献として『伊能忠敬測量日記』と大谷亮吉『伊能忠敬』をあげている。しかし、大谷本は「四月十三日没」としているのだから、これを参考にして「四月十八日没」というのは理解できない。同様に、平凡社『日本史大事典』「執筆者・保柳睦美」は参考文献として大谷亮吉『伊能忠敬』、保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』、小島一仁『伊能忠敬』をあげているが、これらはいずれも「四月十三日没」としている。「四月十八日」は一体どこから出てきたのか。全く不思議である。

結局、「四月十三日没」と記述している事典はインターネット百科事典ウイキペディアだけであった。この百科事典は誰でも書き込める自由編集の形をとつており、情報の信憑性は保証されていない。しかし「伊能忠敬」の項を読むと、多くの参考文献を参照して書かれた労作であることがわかる。大手出版社の多数の事典類が、先行の大辞典の（おそらくは校正ミスと思われる）誤記を横引きしたかのようなどミニ倒しを演じているのとは対照的である。

今回のことではからずも人名辞典類の裏側を見てしまった。各出版社は先行大辞典の権威に頼るのでなく、自力で資料に当たり、責任をもつて編集してもらいたいものだと思う。

ちなみに、忠敬先生の公式書類上の没年月日は「文政四年九月四日」、「未之中刻」（午後二時頃）、享年は「已歳七十七」であった。（了）

※忠敬先生の没年月日について伊能洋氏のご教示をいただいた。厚く感謝する次第である。

※大矢真一（一九〇七—一九九一）は、日本の数学史学者。富士短期大学教授。日本数学史学会長を経て名誉会長。『日本科学史散歩』江戸期の科学者たち』中央公論社、自然選書



全ての道が通じたローマを訪ねて

戸村茂昭

はじめに

世界各国からの道をローマに通じさせたローマ帝国、そして世界中のカトリック信者が巡礼に訪れる新しいエルサルムであるバチカン、そのどちらにも関係を持たない身にも拘わらず「ローマへのバカンス旅行」という「棚から牡丹餅」、いやいや季節柄「棚から御萩」が落ちてきた。今年の誕生日を以って企業年金が満期になり、今後はつましい公的年金生活者となつて寂しいだろうからと、娘の婿殿が親孝行の真似事と称して仕事の関係でしばしば出張して気に入っているローマを見させてくれるようになったという次第である。

シニア世代になつてまさに「五十の手習い」として天文暦学を学び、天命を得て日本全国を歩きとおして精巧な地図を完成させた忠敬先生には申し訳ないが、ローマがローマたり得た背景には必ず精巧な地図が存在していたに違いない。その証拠とか名残でも目にし、そのことを伊能忠敬研究に投稿できればとアリタリア航空に搭乗したのであつた。

一・バチカンについて

成田国際空港を午後一時過ぎに離陸した飛行機は北に向かい、シベリアの上空を経てローマの中から三十キロ南西に位置するフィウミチーノ空港（別名レオナルド・ダ・ヴィンチ空港）に直行で着陸した。現地時間で午後七時。婿殿が気を利かせてくれて座席はプライマリー・エコノミストであったが、いやはや十三時間のフライトはシニ



図2.ローマ市庁舎(裏側)

一・バチカンについて
成田国際空港を午後一時過ぎに離陸した飛行機は北に向かい、シベリアの上空を経てローマの中から三十キロ南西に位置するフィウミチーノ空港（別名レオナルド・ダ・ヴィンチ空港）に直行で着陸した。現地時間で午後七時。婿殿が気を利かせてくれて座席はプライマリー・エコノミストであったが、いやはや十三時間のフライトはシニ



図1.ローマの城壁 ピンチアナ門

アにはきつかった。止宿先はボルゲーゼ公園の南端にある城壁ピンチアナ門（図1）から百五十メートル程旧市街に入つた高級住宅街に在る五つ星、映画「甘い生活」のロケが行われた地域とか、気分はすつかり二千年前にタイムスリップしてしまつた。実は翌日以降ローマ市内を歩きまわつて分かつたことは、旧市街の殆んどの領域の地下及びその地上部分とはローマ帝国の遺蹟が玉石混淆の融合状態であることを目の当たりにしたのである。

その融合状態の顕著な代表例がカンピドーリオ広場にある市庁舎である（図2）。ここは古代ローマ時代は神殿が置かれその遺跡がそのまま最下段、その上に中世の元老院の建物、更にその上にミケランジェロ設計になる建物が建造されて現在に至つているのであった。

二・精巧な地図があった

バチカン博物館には様々なギャラリーがあつた。例えば「大燭台のギャラリー（古代彫刻）」、「エジプト美術館」、「新回廊（古代彫刻）」、「ラファエッロの間」等、そのようなギャラリーを流汗淋漓の状態で人波みに押されながら、見た瞬間にその彫刻や宗教画や石造などの名前が忘却の彼方に消えてゆく中で伊能忠敬オタクにとつては歩みを止めたくなつたギャラリーがあつた。その名は「地図のギャラリー」。イタリア各地方と教会所有の土地

二・精巧な地図があった
バチカン博物館には様々なギャラリーがあつた。
例えは「大燭台のギャラリー（古代彫刻）」、「エジ
プト美術館」、「新回廊（古代彫刻）」、「ラファエッ
ロの間」等、そのようなギャラリーを流汗淋漓の
状態で人波みに押されながら、見た瞬間にその彫
刻や宗教画や石造などの名前が忘却の彼方に消
えてゆく中で伊能忠敬オタクにとつては歩みを止め
たくなつたギャラリーがあつた。その名は「地図
のギャラリー」。イタリア各地方と教会所有の土地

の地図が数十枚展示されていた。中でも古代イタリア全景を表しているとされている地図に目が留まった（図3）。



図3. 地図のギャラリーに展示のイタリア全図

一見すると、記憶の中にある長靴の形をした現在のイタリアの地図にそつくりである。ガイドの方に聞くと、現在のイタリアの地図に殆どそつくりで正確であるとのこと。そして、この地図は十六世紀の後半に数学者兼宇宙学者兼建築家のイニヤーツィオ・ダンティが描いたものであるとのことであった。つぶさに見てみると、江戸時代の国絵図とは違い、最近のネットで紹介されているグーグルアースのように宇宙からの画像のような表現形式をしており、結構正確であるように感じられた。やはり、世界各地からの道をローマに通じさせたローマ帝国、そして、世界中のカトリック信者が巡礼に訪れる新しいエルサルムのバチカン

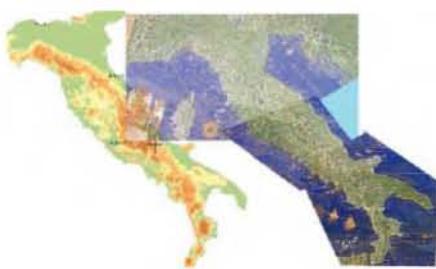


図5. 北部を時計回りに15度回転させて重ね合わせたもの

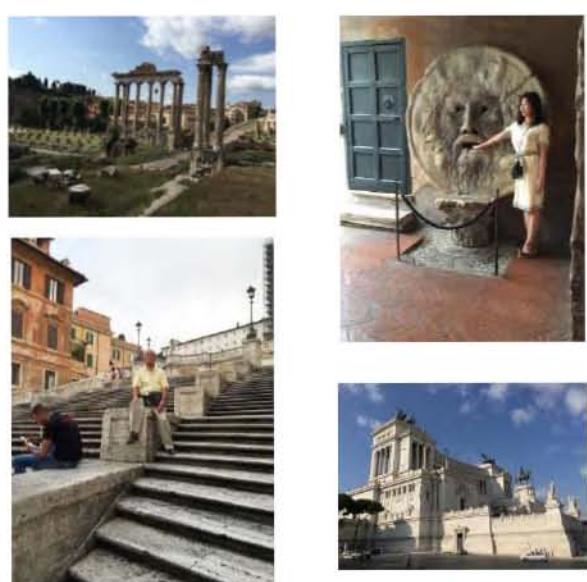
図4に示した通り、結果として南端は一致するようであるが、北部の方はローマのやや南部のあるたらから西方に十五度程偏っているようであった。これは各地方の下絵をつなぎ合わせたズレではないかと思い付き、北部を十五度ほど時計回りに回転させて再度重ね合わせてみた（図5）。

すると、ほぼ一致した。

つまり、仮説は大筋成立したように思われるのであるが如何であるうか？識者のご判断を伺いたいものである。



図4. 現在のイタリア半島を
展示の地図に
重ね合わせた状態



三、終わりに

ローマの旧市街は案外狭い。一日も過ぎると案内なしで地図を頼りに名所旧跡を訪ねられる感じがしたので「ローマの休日」の追体験としやれてみた。先ずは「スペイン広場」、続いて「トレビの泉」、更に足を延ばしてローマ発症の地と言われる「フォロ・ロマーノ」「コロッセオ」「カンピドーリオ広場」「眞実の口」「チルコ・マツシモ」いずれも「ローマの休日」や「ベン・ハー」や「クロエ・オペトラ」という映画でおなじみの場面が想いだされ、二千年のタイムスリップによるバック・トゥ・ザ・フューチャーの旅をしたような錯覚に陥つたものである。

林蔵と秀蔵（上）

柏木隆雄

御用提灯に警護された二丁の唐丸駕籠が奉行所の門を入った。御書物奉行天文方、高橋作左衛門

景保が逮捕された。

文政十一年十月十日深夜、町中をおおぜいの補吏が駆けぬけた。奉行所内は篝火が焚かれ、葵の御紋の幕も張りめぐらされて、次つぎに御役職の駕籠も到着した。

作左衛門景保の罪状は、ご禁制の日本図をオランダ特使シーボルトに渡したことである。

奉行所の屋敷内の奥の間、林蔵が控えている部屋の襖が開いて入ってきたのは町奉行の筒井伊賀守、
「間宮どの、お待たせしたな、夜分遅くのお出ま
しでかたじけない。いま景保どのの一応の詮議が
済みました」

「お役目ご苦労にござります」

林蔵は膝を正して頭を下げた。

「大目付村上大和守どの、御目付本目帶刀どにも立あつていただき申した、押収した品々はこれから調べになる。おそらく咎めは天文方にも及ぶことになろう」

吉川克藏、永井甚左衛門などの顔が浮かんだ。
伊能忠敬の地図御用所に出入りしていた者どもで

門は景保と同刻に捕捉され奉行所内に留置され
いた。

林蔵の密告が端緒となつて幕府を動かしこの夜の一斉逮捕となつた。この件はどこまで展開をみせるのか。長崎の蘭学者や佐原の伊能家にも及ぶのか。林蔵は怖れを感じていた。

「ところで間宮どのは石町の長崎屋に入りした
ことがござるか」

奉行のこの問い合わせに林蔵の心は一瞬たじろいだ。シーボルトは景保を通して林蔵の蝦夷図をしつように所望し、そのことで景保を介して一度だけシーボルトに会っていた。そのときは師の忠告を思いだし、長崎屋の店先での挨拶にとどまつた。

林蔵が忠敬宅で寝起きしている頃、忠敬は息子の秀蔵に

「長崎屋には行くことならん、お前などの出入りする所ではない」と言つてゐるのを聞いたことがあつた。

日本橋石町の長崎屋はオランダ国カピタンの江戸参府の時の定宿である。林蔵は普請役の身分であつたが特命の隠密でもあつた。

景保は書物奉行の立場を利用して、長崎屋には自由に出入りしていた。

林蔵は奉行の意図を詮索しながらおずおずと答えた。

「いえ、いち度も出入りしたことはございません。

どのような人物が出入りするのか偵察に辺りへ出向いたことはありました
が

「そうでござるか。それはよかつた」

奉行はいざれ店持の長崎屋源右衛門にも詮議が及ぶことをほのめかした。
夜も更けて暁七つの刻が近づいていた。そこに

酒肴の膳が運ばれてきた。

奉行自ら銚子をとつて林蔵に酒をすすめた。そしておもむろに懐から金子包を取りだし、林蔵の前に置いた。

「これは些少ながら、今夜のお出しの御礼と、駕籠代でござる。どうぞお納め下され」

林蔵は恐縮して頭を下げた。

「二丁重にて有難きこと」

「それからこの書付は先刻、景保どのに書いてもろうたものでござる。ご覧下されて結構」

林蔵は半折りにした一枚の書付を手にとり文面に眼をはしらせた。景保どのの字体に相違ない。文意はこうである。

飛脚を以つて態々申述べる。一昨年シーボルトに送りし日本並びに蝦夷地の地図は、ご察度を蒙り恐れ入る事に候、之により右両図いかようにて戎申さずば、余は勿論のこと其の元にも罪過直ちに参るべく候。馬場為八郎にもこの意を伝え、急ぎ手段を以て取り返し、上封の上、奉行所へ差出すべし。かよう従えば、其許の罪過も薄かるべしと存じ候。呉々も迅速御取戻し専一頼み存じ候。その為、態々の愚礼を進候。不具

吉雄忠四郎様

高橋作左衛門景保

この吉雄忠四郎はシーボルトの長崎での通詞、名は忠四郎ではなく忠次郎が正しい。

林蔵は言葉をはさんだ。

「恐れながら、宛名が忠四郎となつておりますが、忠次郎が正しいようで、また忠次郎直属の上司は

大通詞の末永甚左衛門様、このお名前も併記されたらよろしいかと存じますが」

林藏は以前、蝦夷図のこととで長崎の吉雄通詞とやりとりしていて、書簡も受けたことがあった。

そこには上司として末永の名も記されていた。吉雄個人宛よりも内容からして連名なればより重圧がかかるように思えた進言であった。

吉雄は一時、江戸に在つて天文方和解御用に出仕していたが、シーボルトの江戸参府のときに、シーボルトと景保との間をこまめに取りつき、先年、天文方を辞し長崎に戻っていた。

林藏のこの進言に筒井伊賀守は

「かたじけない。これは念のため景保どのに数枚書かせた。末永の名も加えておこう」

書付は、奉行か御目付の本目どのが、文意を指示し、景保の手で書かせたに相違ないと思つた。「ところで間宮どの、今般の件は、貴殿のご進告に依るところが多い。事の成行から景保どのの親族、天文方の朋輩等にもお咎めがあるであろう。かようなことで、貴殿があらぬ謗を蒙ることに相成れば拙者も心ぐるしい。いかがと存するが、暫らくの間、身を隠されば」

林藏が心配していた通りの忠告であった。

明日にでも江戸を離れようと決意した。

奉行所から戻つた翌々日、林藏は浅草の源空寺に向かつた。師の伊能忠敬の墓前に事件の報告をし、その足で佐原に行こうと思つた。佐原の伊能家にも調べが及ぶか、それが心配であつた。

源空寺の忠敬の墓碑の隣りは、忠敬の師であり、景保の尊父でもある高橋至時の墓である。林藏は複雑な気持ちで墓前にぬかづいた。

間宮林藏の今日あるのは伊能忠敬のお陰と言つていい。二人は会うべくして会つていた。最初の出会いは寛政十二年九月、忠敬が蝦夷地東南沿岸

の測量の帰路、箱館に戻ってきた時である。林藏は松前奉行支配下役で、蝦夷地の探検踏査に従事していた。江戸から前年に派遣されていた幕臣の村上島之允の従者として伊能忠敬と面会した。

忠敬は林藏の蝦夷地北方探検の実績を島之允から聞き、その業績を高く評価した。

林藏も忠敬の老身ながら、江戸からはるばる海峡を越えて、この僻地での難儀な測量への率先遂行とその情熱に圧倒され、尊敬の念を抱いた。歳の差はあつても肝胆相照らすであつた。忠敬は自分分の歳から考えて、再びこの地を訪れることが危惧され、蝦夷地の未踏の部分の測量は、この御仁に任せられると直感し、江戸での再会を約した。

江戸での再会が実現するまでに十一年の歳月が過ぎた。

この間、林藏は東蝦夷地、南千島などの測量、探査に従事し、ロシアがエトロフ島のシャナを襲つた「シャナ事件」にも関り、その時の武勇伝が江戸表まで伝わつていて。

文化五年はカラフトの探検、松田伝十郎と共にラツカまで行つた。

その頃、忠敬の測量行は二次、三次と続き東日本域のみならず西日本、九州にも及んでいた。天文方の下役も加わり、幕府の大事業に発展していくた。

文化八年五月、忠敬は九州域の長い測量の旅から久しうに江戸に帰る。身体も休む暇もなく地図作成にかかつていて。林藏もまたこの年の初め、長い蝦夷地での仕事から江戸に帰り、探査の報告

書を幕府に提出、同時に著書の「東薩地方紀行」も上呈した。それらの功勞により、松前奉行支配調査役格に昇進し、報償も賜つた。

林藏は忠敬が帰府していることを知ると、手土産持参で深川黒江町の忠敬宅を訪ねた。忠敬が第二次の九州測量に旅立つ日まで、昼夜を問わず、忠敬から直伝の天文測量術を習つた。昼は地図作りを手伝いながら方位や暦法を学び、夜は天測、夜空の星と對いあつた。

十一月二十五日、林藏は品川宿で測量隊の旅立ちを見送つた。この時、留守居となつていて忠敬の息子の秀藏と二人で御用所まで帰つてきた。旅立つ前夜、忠敬から送辞として贈られた奉書の書付を秀藏に見せ読んで聞かせた。「贈・間宮倫宗序『古人言う』世に非常の人ありて非常の功ありしで始まる詩文調の長い送辞の内容は間宮林藏の北地での業績を讃える言葉で溢れ、なお努力して国につくせ、という結びである。秀藏は黙して聞いていたが、気にかかつたのは、父の忠敬が『相親しむこと父師の如し』と言つてていることであつた。忠敬は秀藏が大坂から測量隊を離脱して、江戸に帰つてから、秀藏に対する態度が徐々に厳しくなつていて。

寛政十二年閏四月十九日、伊能測量隊は総勢六人、千住の宿から蝦夷地に旅立つた。

伊能秀藏十五歳、最年少の参加である。下僕の従者一人を除くと測量技術者は忠敬を含めて僅かに四人、これから長旅の困難が思いやられた。佐原からは忠敬の長男の三郎右衛門景敬、秀藏の祖父の柏木幸七、叔父の時右衛門も見送りに出た。秀藏は四歳の時に生母を亡くし、その母が未入

籍だつたために庶出の子として伊能家で育てられた。長男の景敬が三郎右衛門の名跡と、米穀商、酒造業などの家業を継いだ。二男の秀藏は幼少時から忠敬の薰陶を受け、読み書きや算術の塾に通せられた。算術は、主流だつた関孝和の関流に対抗していた会田安明の最上流和算塾に通い、父親譲りの才能で抜群の成績の子どもであつた。読み書きは津宮村の久保木清淵の和塾で学んだ。久保木清淵は忠敬より十七歳も歳下であつたが、国文学、儒学、天文学に長じていて、忠敬も師と仰ぎ信頼を寄せていた。

測量行では秀藏は若輩ながら従者の一人として凛しく振舞つた。もの覚えがはやく、仕事の手際もよく、忠敬の身の回りの世話も女房代わりにならなかった。忠敬は「秀、秀」と呼んで実践の測量術を伝授した。

伊能忠敬の御用測量は蝦夷地に始まり、二次、三次と回を重ねるごとに従者の人数が増えていった。忠敬の身分も幕臣に昇格し小普請組、十人扶持、天文方高橋景保付という役職を得た。測量行は幕府直轄の事業となり、伊能測量隊は公儀測量方に変わつたのである。

天文方から派遣された下役人が加わることになつて隊の編成が変わつた。それにより、内弟子と役人との間に摩擦がおきるのは、当然の成行き、測量技術の実践に長じている内弟子と、とくに威圧的な態度をとる役人との間には溝ができる。忠敬はそれを懸念し、両者に誓約書を書かせた。

「御用中は、旅の先々に於て威光がましいことは勿論のこと、諸事に行ひを慎しんで入念にご用向きを相勤める」といった内容のものであつた。これは江戸の天文方にも提出した。それでも両者の

間に反目が起つた。

役人は身分が上であるから内弟子に何かと指図する。実務よりも口が先に出る。これが不満の積み重ねとなる。また役人と内弟子とは待遇がまるで異なる。宿の部屋割、食事の内容、それに手当は内弟子の二倍、こんなことから両者に誓約に違背する行為が出始めた。仮病をつかって作業を休む者、待遇の不満を口にする。隊を勝手に離れ江戸に帰つてしまつた者もいた。このような規律の乱れが江戸の天文方まで伝わつてしまい、高橋景保からも厳重な注意書きが届いた。そして厳しい処分も下された。内弟子の平山郡蔵、小坂寛平は破門、伊能秀藏ほかの内弟子にも謹慎が申しわたされた。問題が起ると先ず身内が叱責を受ける。実子の秀藏は、この頃から忠敬の叱責の矢面に立たされることが多くなつた。

秀藏は測量の旅先でもよく勉強した。高名な數学者の会田安明の息子、尾形慶助も第二次から第五次までの測量に従事していた。秀藏と幼な友達もあり仲がよく、二人で神社奉納の算額の問題を考え、旅先の神社などに奉納した。このような二人を仕事第一の忠敬は心よく思わなかつた。佐原の縁者への手紙にこう書いた。

「慶助は学問にのめりこみ、考え方が貴殿や私とだいぶ異なる。困つたものだ」

この批判は秀藏にもおよび
「秀藏も学問をすればするほど人が悪くなつてい
る。秀藏と慶助は地図の仕事は付けたしである。
この短い夜に何時に寝ているのか判らない。そし
て体をこわし、仕事も無精になつてゐる」
忠敬に小言が多くなつた。持病の喘息が出て測

量を休むことも始めていた。

「背中をさすれ、肩を揉め」と秀藏をよびつけ
る。意にそわないと癪癩がおこる。

文化五年の秋、秀藏は病いに罹り半月病床に伏す。測量隊は秀藏を大坂に残し大和路へ向かう。小康を得て江戸にもどつた秀藏は一年ぶりに深川黒江町の御用所に入る。測量隊が帰府するまでに、持ち帰つた資料の整理に明けくれた。

これ以後、秀藏は測量の旅に出ることはなかつた。深川黒江町の留守居を預かり、天文方と佐原の伊能家との連絡役として旅先からの忠敬の指示をこなした。忠敬が旅から帰れば測量図作成の仕事にも従事した。

(続く)

加賀藩測量の足跡をたどる(四)

寺口 学

はじめに

石川県支部による伊能忠敬加賀能登測量の足跡をたどる現地調査は、四回目を数えることになった。

享和三年（一八〇三）第四次測量で北陸・能登国に足を踏み入れた忠敬一行は、今浜村（現在の宝達志水町）で二隊に分かれた。七尾方面の内浦（能登半島東岸部）を忠敬ら五名、輪島方面の外浦（能登半島西岸部）を弟子の平山郡藏ら三名が測量している。

平山隊のルートと宿所等については、七十六号で深見村（現在の輪島市門前町深見）まで報告した。今号では、一〇一四年一〇月五日、その続きとなる輪島市皆月から輪島までたどった模様を述べたい。

また同日には、忠敬隊が測量した現在の七尾市田鶴浜・穴水町川島間も訪れており、併せて報告したい。

なお、この日は、河崎・室山・

一時間半ほどかけて到着したの

相良・寺尾・寺口の五人が参加した。

一、輪島市門前町皆月～河井町（外）

①皆月村・宇兵衛（7／11）

折しも、当日は、台風一八号が北陸に接近しつつあり、ときおり小雨の降る中、調査が行われた。

能登と金沢をつなぐ「のと里山海道」の「道の駅 高松」で会員五名が落ち合い、筆者の自家用車に乗り合わせて一路、輪島方面に向かった。

『伊能忠敬測量日記』（以下、『日記』と表記）によれば、七月一日に当地の「宇兵衛」宅に宿泊している。『新修門前町史資料編三』には「宇兵衛」、「組合頭宇兵衛」とあり、平山一行が訪れた當時も村役人であったと思われる。しかし、今回は宇兵衛の宅地跡や子孫に関する情報を得ることはできなかつた。



今回の足跡をたどる旅付近の伊能図

（『伊能図大全』河出書房新社より）

②上大沢村・六左衛門（7／12）

『日記』によれば、平山隊は

一二日に皆月村を出立し、次の上大沢村方面へ向かっている。その際、「鋸崎」を通つたとあり、これは現在も同じく「ノコギリ崎」と称されている場所で、宝永元年（一七〇四）ごろの『能登一覽記』に「のこぎりば」と見える岩山の崖地である。皆月の南側に位置する五十洲集落から北方向に見渡すことができ、現在は遊歩道が整備され、皆月から上大沢まで歩くこと



左手が皆月集落・右手は五十洲集落（北側高台より撮影）



間垣が連なる上大沢集落（集落北側より撮影）



ノコギリ崎（五十洲集落より撮影）

ができる。しかし当時はまともな道もなかつたであろうし、現在で

この集落も間垣が美しい。関東からやつてきた平山たちは、今と同様の風景を珍しそうに眺めたことであろう。なお、今年三月末から九月末にかけて放映されたNHK連続テレビ小説「まれ」の住む「外浦（そとら）村」は、この上大沢地区を主なロケ地としていたので、この風景を懐かしむ会員もいらっしゃることだろう。

③赤崎村・忠左衛門（7／12）

この先、私達は県道三八号を東方向に進み、平山一行が一二日に宿泊地とした「赤崎村忠左衛門」宅を目指した。

『日記』には、「赤崎村（此村下大難所。崩石多し。人家ハ山の中腹に住。）十町余海辺より上りて止宿」とあり、現在の集落は標高七〇尺ほどの高台に位置し、県道沿いに神社や家並みが続いている。

測量隊が宿泊した「忠左衛門」に関する手がかりは、やや時代が下るが明治五年（一八七二）に「肝煎山崎忠左衛門」と記された文書がある。ほかに史料が見当たらずやや心もとなないが、『西保村史』によれば赤崎集落で一軒のみ山崎家（屋号アタシヤ）が確認でき、おまかに位置も記してあつた。しかし、『住宅明細地図』には掲載されておらず、集落を訪れた当日もほとんどの家が不在で、明確な場所を特定することはかなわなかつた。後日、赤崎町区長と連絡を取ることができ、山崎家は現在無住

た。その後、集落を再訪し、旧山崎家の隣家の方にお聞きしたところ、同級生がいたが他所へ転出したとのことであつた。

なお、この赤崎村は、嘉永三年（一八五〇）藩主前田斉泰による能登海岸巡視に際して休憩場所となつており、現在でも斉泰が腰を休めたという「御腰懸所」の旧跡が伝えられている。

④輪島河井町・木下与次兵衛（7／13）

翌一三日は、未明から大風となり、赤崎村を出発した一行は、下



赤崎集落（左手家屋の裏手に山崎家があった）

山村『日記』には「海辺にあらず、

岡村である」を経て、途中「小鶴入」（『日記』では「鶴入村の内」とするが現在は小池町地内）周辺

で舟を使って測量をしている。その先、海岸は通行不能であるため山道に入っているが、この地を「八

町地」または「八王子」と記している。これは、現在の小池町地内で、「小池口」のバス停近くにある

「八王子権現社」に由来する名称である（『西保村史』）。八王子大権現は、海岸から五〇〇㍍ほど離れた標高約一三〇㍍の場所にそり立つ巨岩を神体としている神社である。石は地中深くまで延びて、

その下に潜んでいるナマズの頭を押さえて地震が起こらないようにしているとして「地震岩」とも称される。訪問時は、参道が草木に覆われていたため、近づくことが出来なかつたが、遠くから見ても圧倒される大きさで、まさに神が宿る磐座（いわくら）としての威厳が感じられた。

さて、一行は山道を通って光浦

村の海岸に出た。輪島の手前で「天神山」（現在の輪島崎町地内）を越えており、この山がある岬を「加茂浦岬」と記しているが、現在は天神山の北側の海辺を「鴨ヶ浦」と称している。そして、輪島川（河原田川）に架かる「板橋」を越え、次の宿泊地である河井町の「木下与治兵衛」宅に至つている。



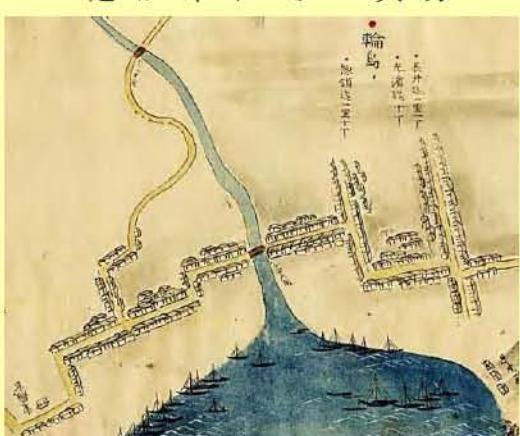
八王子権現社の入口石段



「地震石」とも称される八王子大権現の巨岩



「完全復元伊能図全国巡回フロア 展
in 金沢工業大学」にて



「能州道中図」輪島部分（石川県立図書館所蔵）
右が鳳至町、左が河井町（方角は下が北）



鳳至町と河井町をつなぐ「いろは橋」

することはできなかつた。

このあと私達は、輪島市・珠洲市に至る外浦の調査を一旦止め、

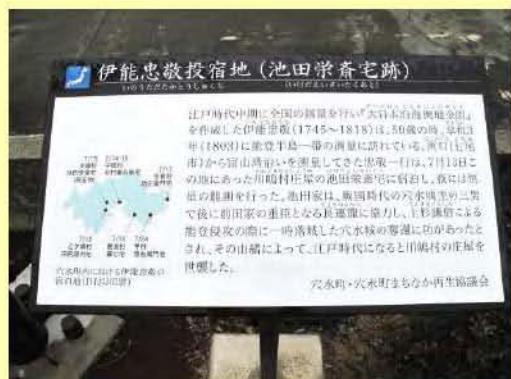
忠敬隊が測量した内浦側の穴水（田鶴浜）の調査に向かつた。

二、鳳珠郡穴水町・七尾市田鶴浜町（内浦）

①川嶋村・池田栄斎（7／13）

忠敬隊は、田鶴浜から穴水へと、北に向かつて測量を進めて行つたのであるが、今回は、時間的な制约もあつたため、逆に南下するルートで宿所探しを始めた。

まず、七月一三日に宿泊した川嶋村（現在の穴水町川島）「池田栄斎」宅を目指した。池田家は、天



「伊能忠敬投宿地（池田栄斎宅跡）」の案内板

領であった川嶋村の庄屋を代々務めた家柄である（『穴水町の集落誌』）。屋敷跡地に関する情報は事前に得ていたため、のと鉄道七尾

線穴水駅近くにある該当地へ向かった。現在は、個人宅の駐車場と駅へ続く道路の一部となっているが、訪れてみると驚いたことに「伊能忠敬投宿地（池田栄斎宅跡）」と記された案内板が設置されていた。穴水町と穴水町まちなか再生協議会が設置したもので、池田家の由緒や忠敬が現在の穴水町内で宿泊した六家とその位置を示した地図が描かれている。石川県内では初めてとなる忠敬の足跡を示した野外の案内板である。（七十六号既報）

県内に、今後こうした案内が増えてくれば嬉しい限りである。

②乙ヶ崎村・田尻源内（7／12）

続いて、同月一二日に宿泊した乙ヶ崎村（現在の穴水町乙ヶ崎）の「田尻源内」宅へ向かつた。事前の情報により屋敷地の見当をつけ、近所のおばあさんに場所をお聞きしたところ、「ゲンナイサはそこの煙だよ」と屋敷跡を教えてくれた。裏手の高台には墓石も数基残されていた。墓の中でも最も南側



田尻源内家の屋敷地跡（墓地は左手高台）

誰かが忠敬が出会った源内の可能性がある。お話を伺つたおばあさんは、自分の家の土地も元々は田尻家の所有地で、昔は相当広い敷地をもっていたのではないかと話してくれた。『日記』には「家作大にして宜し」と記しており、繁榮していた様子がうかがえる。なお、子孫の方は転出されているとのことであった。



池田栄斎屋敷跡（写真中心が案内板）

③外村・助左衛門（7／11）

さて、同月一一日は深浦村にて昼食をとり、宿泊は外（そこで）村没年は文化八～文政七年（一八一～一八二四）で、うち一人は女性であることから、残る三人中の左衛門」宅であった。事前の調べ



室木家（現在は「明治の館」として一般公開）



「洋装なかむら」と田鶴浜の通り

現在の室木家は、明治二一年から一〇年がかりで造られた、合掌組入母屋造りの豪壮な建物で、七尾市の管理の下「明治の館」として一般公開されている。家屋内を見学しながら、館員の方に伊能忠敬についてお聞きしたところ、宿泊については聞いたことがあるとのことであった。今後、忠敬宿泊の史実も案内してはどうかと提案

によると、天領であった外村の庄屋室木家は代々「助左衛門」を名乗っており、『中島町史 史料編下』享和元年（一八〇二）の史料に出てくる「外村庄屋 助左衛門」が忠敬をもてなした当時の主人である。

したところ、ぜひ市役所に働きかけたいとのお返事をいただいた。

④田鶴浜村・中村屋五郎右衛門

7
8.
9)

今回の調査では最後となる、八日・九日連泊した田鶴浜村（七尾市田鶴浜）の「中村屋五郎右衛門」宅に向かつた。中村さんは衣料店を営んでおられるが、火災にあつていることもあり、史料というものは残っていないとのことであつた。

た。だが、「神仏の真似しても、五郎右衛門の真似するな」といわれていたとのことで、「五郎右衛門」を名乗っていたのは確実であろう。『日記』には「家作よし」とあり、それなりの家構えであつたと思われる。

た事実については、ほとんど知られていないのが現状である。今後、研究会の活動を通じて、忠敬を身近に感じてもらえるよう、勤めていきたい。

今回の調査では、二手に分かれ
た平山隊と忠敬隊が巡った、輪島
市皆月・同市河井町間、穴水町川
島・七尾市田鶴浜間を訪れた。
外浦側については、具体的な宿
泊地として赤崎村が判明した程度
で、今後さらなる調査が必要とな
ろう。それに対し、内浦側につい
ては、ほぼ宿泊地が明らかとなつ
たのみならず、穴水町川島の池田
栄斎家跡地には、伊能忠敬が訪れ
たことを紹介した看板が設置され
ていたことに、驚きと喜びを感じ

たのみならず、穴水町川島の池田栄斎家跡地には、伊能忠敬が訪れたことを紹介した看板が設置され、いたことに、驚きと喜びを感じ得た。



「完全復元伊能図全国巡回フロアー 展 in 金沢工業大学」にて

※今回は、昨年秋の探訪報告である。今年五月に輪島市・珠洲市、七月に能登島探訪を終えた。あと三回で加賀藩領全域の探訪を終える予定である

空撮散歩
伊能測量隊の足跡と福島町のでき」と
北海道福島町 中塚 徹朗

先の8月30日に開催された北海道福島町「第13回“千軒そば”」の花鑑賞会。日経新聞(全国版)でも取り上げられた。蕎麦の真っ白な絨毯の上で伝統の松前神楽を奏上する福島町ならではのイベント。33座のなかから、

毎年5座ほどの神楽が奏上される。多くのカメラマンの注目的が写眞の八乙女舞。花の中に埋もれて幻想的だ。加えて朱色の巫女の袴と白の花とのコントラストが眼に焼き付く(写真1)。約一ヶ月後、神々の祈りを湛えた美味し新蕎麦が地元千軒そば店で提供される。(写真8)

蝦夷地測量の往復路
忠敬さんは、このイベン
ト会場のすぐ横を測量



写真 1. そばの畠で舞う幻想的な松前神楽八乙女舞

して行った。知内川を渡つたすぐ近くの一ノ渡(イチノワタリ)で帰路昼食を行はとつたと測量日記にある(写真2参照)。そば好きで有名な忠敬さん、當時とれたての新ソバを食していたのかも知れない。

伊能測量隊の測量成果を点線で示す(写真2)。蝦夷地測量開始2日目。5月21日(新暦7月12日)



写真 2. 伊能隊の測量経路と現在の神楽を舞うソバ畠。川をはさんだ一ノ渡で一行は昼食をとった
(ドローンで撮影)

の測量日記には「福嶋より七里十
丁四十八瀬と云小川ヲ數十度越渡
る」とある。数多く渡ることから
「四十八瀬」という地名になった。
当時の蝦夷地の街道は、このよう

に川岸を歩くことが多かったのだ
ろう。つづく山並は茶屋峠。ブナ
林を中心に戻蒼と草木生い茂るこ
の時期は現在でも熊も虫も多くて、
さぞ一行は難儀したことだろう。

写真 3(右) 千軒一ノ渡上空から福

島町を望む

忠敬さん一行の測量日は新暦 7 月 12

日。空撮日は 2015 年 7 月 15 日。イチ
ノワタリとトチマツ。文政大図に書かれ
た地名を記した。残念ながらトチマツ
という地名は現在失われてしまった。



写真 4(下) GPS ロガーの測量ラ
インと忠敬さん(実は間宮林蔵)測
量のラインを比較すると大難所で
の測量とは思えないほど良い精度
に見える。

トチマツ

↑ ← →

イチノワタリ

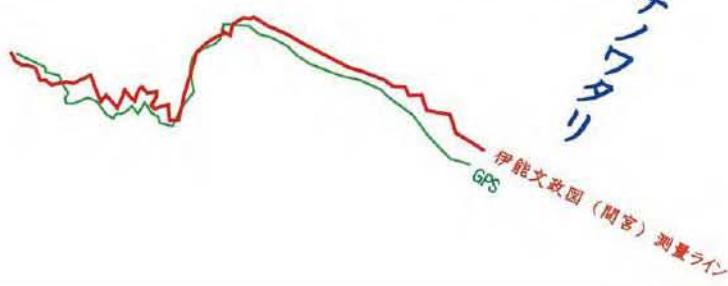


写真 5 は、写真 2 と同じ構図の
空撮だが、新暦 11月初頭の茶色一
色の（一行が通った頃の）季節感
を見て頂きたい。蝦夷地測量帰り
も忠敬一行は福島町を測量。9月
16 日（新暦 11 月 2 日）知内町を
出立「行程四里半一ノ渡に而中食、
夫より二里半七ツ時福嶋へ着、止
宿、夜晴測量」と、ここ福島町字
千軒一の渡で昼食を取る。ちよう

ど 7 年前（1793
年）、松前へと向か
うラクスマント大黒
屋光太夫一行がや
り一ノ渡で昼食を取
っている。（ラクスマ
ン一行、実は隠れて
函館→松前間の測量を
していた。）

写真 5. 空撮日は 2014 年 11 月 5 日。初冬の色
合い。いつ雪が降っても不思議では無い。66 日間
平均 20km/日と急ぎ足での蝦夷地（松前一別海）測
量であった。

◇伊能測量隊を顕彰する

春秋のイベントの開催

伊能測量隊が測量した古道を歩くイベントを地域の方々と開催している。「殿様街道ウォーク」と称して、春と秋の年2回開催している。今年の春で20回目。約7kmのブナ林の古道を3時間ほど散策する。テーマは歴史・自然・食・伝統。歴史の説明と花や樹木等の説明を聞きながらの散策。下山後、「千軒そば」と「松前神楽」を堪能するという内容だ。5年ほど前GPSロガーでとったコースの軌跡をGoogle Earthに張り込み、文政大図の測量ラインと比較してみた。

（写真4参照）驚くべき古道の軌跡が感動とともに現在に蘇った瞬間を思い出す。それ以来、この道は自信を持つ「伊能・間宮測量の道」と説明している。秋の開催は10月末の日曜日を予定している。是非みなさん一度いらっしゃってください。



写真 7. 秋の街道ウォーク
250才の巨木ブナと親しむ



写真 6. 春の街道ウォーク 歴史の説明をする筆者



写真 8. 千軒そば 忠敬さんも食べただろうか？

へと渡つたのが寛政12年9月16日。新暦では11月2日だ。写真9. 10をご覧いただきたい。毎年10月下旬から11月上旬、北海道最南端の白神岬では南へ向かう野鳥の渡りのピーク。

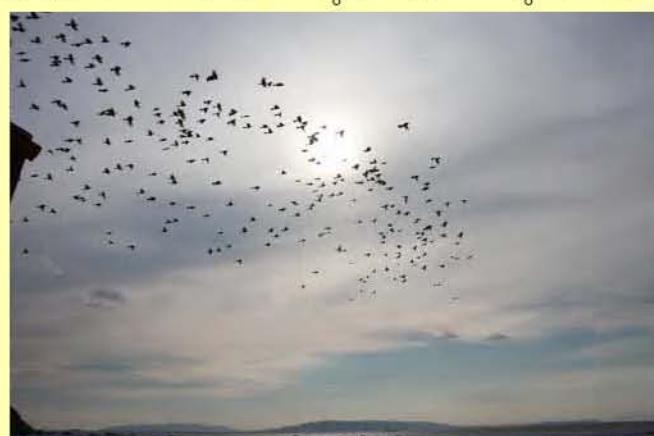
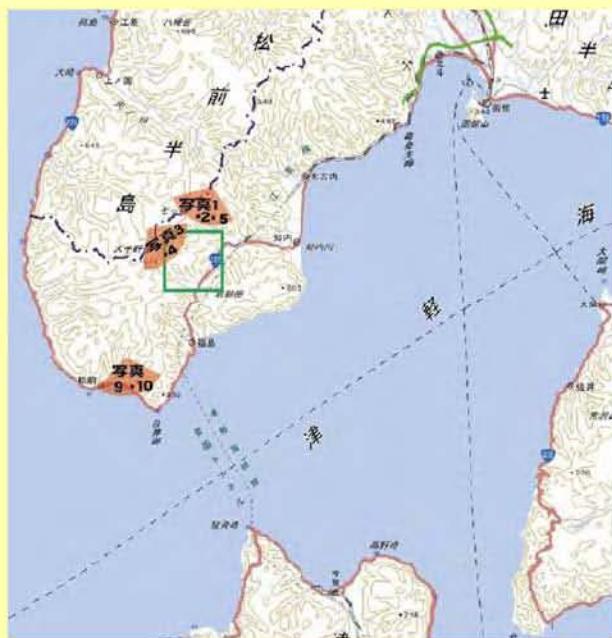


写真 9. 每年10月下旬から11月上旬、白神岬から一斉に飛び立つヒヨドリの群れは対岸の龍飛岬へと向かう

群れにまみれるとまるで夢見心地。感動が海を渡るのだ。蝦夷地測量を無事終え安堵の気持ちの伊能測量隊一行をこの何百何千という鳥の群れが祝福していたとしても不思議ではない。



写真撮影箇所図。(国土地理院ウォッチ図)



写真 10. 蝦夷地測量を終え松前から三廻へと向かう伊能忠敬の乗った舟はヒヨドリの群れに祝福されただろうか？

minyu-net 楽島民友

【ANA】ブリュッセル新規就航
フルフラットシートで快適な旅へ！半日でも楽しめるブリュッセル旅行。

迷路 ハード ランドスケープ ブログ ベイビート リスト 雑誌・書籍 ニュース

江戸時代の測量家、伊能忠敬(いのう ちかのり)のうなづひにさきにスポットをあてた連載企画。東北・蝦夷地での測量の仰、領内にも足を運んでいます。当時の伊能の活躍、功績を伊能忠敬研究会幹事・東北支部長で日大工学部非常勤講師の松宮輝明さんが担当します。

[25] 17年にわたる全国測量 一步一步が大きな成果に
[24] 篠代で食糞糞 蔵天候で成功せず
[23] 秋田富 小野小町の生涯に興味
[22] 岐阜を潤す「茶の清水」佛聖捨尾芭蕉を想う
[21] 山形路を行く 米沢藩の記録から久知
[20] 松原峠を越える 会津と米沢を結ぶ要衝
[19] 大也峠を越える 家人に一筆したためる
[18] 大塩村の山地 「甚だ白く、味は甘酸」
[17] 米沢街道 道中の村に止宿の手配
[16] 翠柳山の標高測定 朝ヶ城の美しさに感嘆
[15] 銀杏代湖を遊覧す 晴大前の秀峰和ぎ見る
[14] 勢至室町を行く 考査な歴史語る「一里塚」
[13] 上小屋本陣の内山茂市宅 日記に「作業上」と表める
[12] 風わう水津街道へ「幕府の御用」と止宿を通知
[11] 第3次測量隊の宿 白坂村で緯度の天体観測
[10] 第3次で会津を測量 國家事業の大命受ける
[9] 碑文に残る謡の文言 地図の雑誌解説(2種の式)
[8] 第2次測量隊浜街道を行く 県内測量で16日間宿泊
[7] 俳諧にも歌い詠霧 俳句のまち須賀川に足跡
[6] 第1次測量隊、蝦夷地へ 正確な測量、幕府も感心
[5] 第1次測量隊結成 子午線の長さ測る旅へ
[4] 幕府天文方に入門 隨店後、猛勉強頑角
[3] 生い立ち 学問好きで多くの逸話
[2] 「伊能忠敬図」炎上す アメリカで「大図」発見
[1] 国宝指定と伊能忠敬の経緯 日本国圖

福島民友新聞社
〒960-8618 福島県福島市相馬町4の29
個人情報の取り扱いについて リンクの該当について著作権に
国内外のニュースは共同通信社の配信を受けています。
このサイトに記載された記事及び画像の無断転載を禁じます。copy

上:福島民友新聞のホームページ
右:幻となったフロア展のポスター

幻のフロア展

二〇一一年一月十二日から二〇一一年八月三一日まで毎週、福島民友新聞に「伊能測量隊 東北を行く」と題して、本会会員・松宮輝明さんによる伊能測量隊の東北地方各地の測量記録が測量日記を辿りながら、その土地の様子も含め二五回の連載記事として掲載されました。

この記事は、同年四月二九日から五月一日

開催の「伊能忠敬復元地図フロア展 in 郡山」のための連載記事でしたが、三月十一日の東日本大震災のために「幻のフロア展」となってしまい、後日記事だけが連載されました。東北復興のため、改めて伊能大図展の実現に向けて準備が進められています。

新聞掲載から四年が経過しましたが、記事は現在も福島民友新聞社のホームページに掲載されています。URLは左記の通りです。

<http://www.minyu-net.com/serial/inou/>

各地のニュース

平成27年度

九州支部例会報告

九州支部事務局長
井上辰男

恒例の九州支部例会が平成27年7月11日（土）午後1時から例年同様「福岡市立南市民センター」において16名の出席を得て開催しました。

冒頭石川支部長より、本部・支部

関係事項報告あり、ゲスト参加の佐賀県嬉野市から中野登氏、山口県宇

部市から溝渕義雄氏の紹介後、物故者となられた松尾昌英元会員、中富道利会員のご冥福を祈り黙祷をささげ講演を始めた。

最初に松尾卓次氏から「伊能忠敬と島原測量」の講演で、松尾氏の地

元島原領内の測量をスライドを使い詳述され、続いて池田一樹氏から

「長門・周防（海岸線）の伊能測量について」の講演で、山口県萩市沖の見島について発表があった。

次に平川定美氏から「佐世保伊能忠敬測量記念碑のその後」で平成26年5月に完成した記念碑の諸問題について報告され、引き続き事務長から「北九州市伊能忠敬献花の集い」についてスライドを使い紹介した。

休憩後、原口光和氏から

「今後の人口問題と健康について」の講演で、皆様関心の伊能測量についての講演で、山口県萩市沖の見島について発表があった。



ア展「唐津を終えて」の講演で、唐津が全国巡回フロア展最終開催で有終の美で飾ることができたこと、事前に「伊能測量隊の足跡をたどる歴史探訪ウォーク」を実施したこと、活動記録展が馬場良平会員を中心に行われたこと等の報告があった。その後井上辰男氏から「伊能測量隊 坂部貞兵衛支隊長の墓をたずねて」の卓話があり、墓碑、伊能忠敬天測之地記念碑等をスライドを使い紹介された。

最後に事務長から会計報告、遠藤会員から監査報告、石川支部長から会員動向等報告後、恒例の記念撮影をおこない17時に閉会した。



「測量の日」 雜感
藤沢市 大沼 晃

六月三日は「測量の日」である。

日本で測量の意義や重要性を国民に広く知らしめるために、平成元年に建設省（現在の国土交通省）によって制定された。その趣旨を受け、（一社）神奈川県測量設計協会は六月二日神奈川県民ホールで国土地理院応用地理部の倉田一郎氏を講師として招き記念講演会を開催した。

協会長のオープニング挨拶の中で、測量に関して江戸時代に大活躍した伊能忠敬と日本の近代化の幕開けで、先、健康維持と老後の生き方等についてのお話があり、続いて山田洋氏から「完全復元伊能図全国巡回フロ

部測量官・柴崎芳太郎の業績につい続いて場所を移し懇親会に入り、事務長の司会で若手遠藤さんの乾杯で始まり、全員のスピーチで大変賑やかなひとときを過ごし、最後は遠路出席の平川さんの中締めでお開きとなりました。忠敬先生を語る有意義な一日を過ごすことができ、皆様おつかれさまでした。

て触れていた。その後、今日に至るまで測量関連で特筆する人物が出ていないと残念そうに語っていたのが印象的であった。

協会が配布した一連の資料の中に協会の誌があり、その冒頭に「測量は、古代から現在まで私たちの文明を支えてきた最も基本的な技術です。古代エジプトではピラミッドの建設に高度な測量技術が用いられ、また、我が国では江戸時代に日本全国を実地測量して驚くほど正確な日本地図をつくった伊能忠敬の業績が広く知られています。」（後略）

本地図をつくった伊能忠敬の業績に記述している。忠敬先生の業績に触れたこの条を読み、伊能忠敬研究会の会員として満足感に浸りながら帰宅した次第である。

一方、測量官・柴崎芳太郎の業績に関する物語は、以前、映画「剣岳」の記述を見せておこり高ぶるようないろいろと助言を受けたという一面があるが、伊能測量隊の間では和が保たれていたようだ。

柴崎芳太郎については筆頭案内人との長次郎を全面的に信頼し、いろいろと助言を受け入れて諸々の岳風景の画面に心を奪われていたようで、詳細に関してはうろ覚えであることに気づき、改めて本を読むことにした。本を読み進むにしたがい測量と言ふ共通点があるためか次のようないい。伊能忠敬と柴崎芳太郎との類似点を感じ取った。

(一) 上下左右を問わざる人間関係に気配りが出来る人たちである。

特に「ホウ（報告）レン（連絡）

(二) 成功への道筋を常に身につけていた人たちである。

五月十七日（旧暦では四月十三

日）は伊能忠敬の命日である。その日に因み、日本テレビの「鉄腕ダッシュ」という番組で三浦半島城ヶ島を舞台に伊能測量の再現風景を放映したが（実際は悪天候で伊能測量隊は未測量であることが測量日記に記述あり）、平地での歩隊組織で、上意下達の世界であつたので比較的動きやすかつたのではないか）。

(二) 仕事へのプライドを有していないながら、けしておこり高ぶるようないることを見せず、チームワークを大切にしている人たちである。

伊能忠敬は、あるトラブルから師である高橋至時にいさめられたり、師の留守を預かる間重富からいろいろと助言を受けたといいう一面があるが、伊能測量隊の間では和が保たれていたようだ。

柴崎芳太郎については筆頭案内人の長次郎を全面的に信頼し、いろいろと助言を受け入れて諸々の岳風景の画面に心を奪われていたようで、詳細に関してはうろ覚えであることに気づき、改めて本を読むことにした。本を読み進むにしたがい測量と言ふ共通点があるためか次のようないい。伊能忠敬と柴崎芳太郎との類似点を感じ取った。

(三) 成功への道筋を常に身につけていた人たちである。

三角点がある場所には「柱石」（ちゆうせき）といふ。石が埋められており、それが経度、緯度、標高の基準となつていること。三角点を設置するためには、(1)事前調査、(2)地形偵察、(3)選定、(4)造標、(5)埋石、(6)観測という定められた手順を踏み、そのためには測量官たちは道なき山谷に踏み入り、例え暑くても寒くとも何日もテント生活を続いたのである。今のような便利な装備がない時代のことであり、苦労の程は伊能忠敬の時代と甲乙付けがたい。

本の題名の「剣岳 点の記」とは、五万分の一の地形図作成のために三等三角点網を完成させるべく、北アルプス剣岳へ登頂し三角点を埋設した物語であるが、三角点標石を埋めた年月日や人名、測量観測の年月日や人名などと共に、その三角点に至るルート、人夫代、宿泊先などの諸費用など必要事項が記録されているものが「点の記」である。柴崎も伊能と同様宿でもテントの中でも克明に記録を続けた。その個々の記録が明治二十二年以降、永久保存資料として国土地理院に保存されているとのこと。

伊能測量日記は国宝になつた。「点の記」もいづれは国宝に順ずることを願つてやまない。

二〇一五年度総会の報告

①散策会（日本橋→茅場町→門前仲町）

六月二十七日十一時、参加者十九名が日本国道路元標に集合。天気予報では降水確率が高く雨の散策会となり空の下、富岡八幡宮まで歩けた。

日本橋は五街道の基点であり忠敬覚悟していたが、傘の出番はなく曇り空の下、富岡八幡宮まで歩けた。

中央通りと永代通りの交差点「日本橋」を左折し、一路茅場町へ。東京メトロ日比谷線の茅場町駅一番出口近くに「地図御用所跡」の看板がある。平成十七年に中央区教育委員会が建てた案内板には、深川黒江町から八丁堀亀島町へ転居後、居住地としてだけでなく、測量図を作成するための地図御用所として利用されたこと。忠敬の死後も同所で門弟や天文方の下役らの手によって「大日本沿海輿地全図」が完成したと記されている。

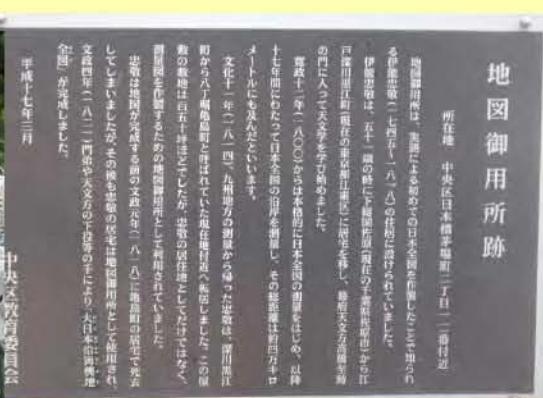
同地からは八名の方が地下鉄に乗車。残りの十一名は隅田川に架かる永代橋を越え、門前仲町に十二時過ぎに到着。

②総会（五十二名出席）

箱田良助の子孫、榎本武揚の玄孫に



説明版に見入る参加者



地図御用所跡の説明版

地図御用所跡

うメッセージが込められている。

先生がお持ちになられた『シベリア日記』（絶版）の文庫本五冊は完売となつた。

講演終了後は、二〇一四年度の活動報告、収支報告が行われた。

新理事に編集担当の山本さん。事務局長の鈴川さんが退任され、菱川さんが就任。

会員からの質問もあり、参加型の総会となつた。

総会終了後、一同記念撮影のため、一階玄関へ。

③懇親会（四十九名出席）



講演する榎本隆充先生



講演に聴き入る参加者たち

あたる先生から知られざる榎本武揚的一面と苦労話しきを、興味深く拝聴することができた。

忠敬のようく測量、地図製作はしなくとも、シベリアで砂鉄が採取できることを調べ、武揚が地理学者であつたこと。忠敬は『測量日記』を残しているが、武揚は『シベリア日記』を認めていた。その内容について、後に金田一京助氏が民族的な視点で物事を表現していると評価している。

また武揚はオランダ語で「冒險は最大の志なり」と名言を残している。これは忠敬の第二の人生で偉業を成し遂げたことと同様に、現代に生きる我々に生涯現役とい

予定通り十七時
開始。司会は小生。

乾杯の音頭は榎

本先生。しばしの

歓談後、スピーチ

タイムへ。毎回お

馴染み、司会が勝

手に会員を指名し

てお話しitida

た。

までは三名の新
入会員。総支配人

である橋本さんの

ホテルは、第九次

測量の止宿となっ

た所。工業高校の

中村先生と町田在

住の渡邊明男さん

は若手の会員。そ

の後は遠方からお

越しの順に北海道

の会員、石川・九

州支部の皆さんが

各々近況報告を熱

く語つていただき

た。

その他、伊能敏雄さんからも大河
ドラマの現状報告、河崎さんから没
後二百年記念誌発行に向けての取
り組み等の報告があつた。若干一時
間三十分足らずであつたが、会員同
士の交流、意見交換が活発に行われ

た。中締めは渡辺一郎名誉代表。
終日梅雨空ではあつたが、富岡八
幡宮は年に一回の忠敬談義に盛り上
がつた一日となつた。

(新沢
義博)



総会参加者の記念写真

フォーラム「伊能忠敬の世界」の開催予定

大河ドラマ「伊能忠敬」推進協議
会がフォーラム「伊能忠敬の世界」
の開催を予定しています。

2017年の大河は井伊家の先祖話に
決まつたようですが、伊能忠敬を大
河ドラマにと頑張っている香取市の
大河推進協議会が12月の行事を左記
のように予定しています。研究会関
係者が保わっております。多数御参
加をお願いします。

①期日 平成27年12月12日
13:00～16:30

②場所 佐原文化会館
入场無料 定員780名

③構成 第1部 講演

④主催 伊能忠敬大河化推進協議
会(会長木内志郎)
⑤特別後援 香取市
⑥協賛 敬研究会、伊能忠
敬顕彰会、伊能忠
敬研究会、佐原商工會議所、そ
の他

第3部 行政代表者懇話会
香取市長、東金市長、九十九里
町長、横芝光町長、多古町長、
江東区長、台東区長、中央区長、
つくばみらい市長 に交渉中
充、渡辺一郎、源空寺住職 な
どに交渉中

会誌76号訂正

前号の会誌の以下の箇所についてお詫びし
て訂正いたします。(編集担当)

- 7p 上段 後から7～6行目
(誤) 上杉景勝(一五五年～一六一三年)
- (正) 上杉景勝(一五五五年～一六一三年)
- 9p 下段 左下航空写真(現在も残る江戸
時代の地割) 差し替え
赤い線が消えていました。下図と差し替
えて下さい
- 13p 下段中央 ■原宿と富士山の距離の式
(誤) 三十三町五十二間
(正) 三十三町五十〇間



国土地理院 昭和50年撮影(CC-BY-SA)

白駒妃登美さん(博多の歴女)

第2部 緑のパネルフォーラム

間宮林藏子孫、伊能洋、榎本隆

充、渡辺一郎、源空寺住職 な

どに交渉中

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十三回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

(今回より改訂増補部分を朱書きで区別していなし)

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】（九州第一次） 豊前小倉～鹿児島～宮崎 自 文化7年1月1日 至 文化7年4月21日

14			13		12		11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号		
(17)	後手中食	先手中食	(16)	中食	(15)	大里村	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	(2. 4)	小倉城下船頭町	福岡県 北九州市小倉北区		
柄杓田村	喜多久村	白野江村	田野浦村	門司村	大里村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
同 北 門 司 区	同 北 九 州 門 司 区	同 北 九 州 門 司 区	同 北 九 州 門 司 区	同 北 九 州 門 司 区	同 北 九 州 門 司 区	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
一向宗西派光照寺	百姓善之丞	庄屋七兵衛	本陣鈴木久左衛門 三原屋為左衛門	庄屋甚五郎	本陣重松彦之丞	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	恒星測定	恒星測定	一同休、試豪。江戸へ年首状を認む。		
		す。 白野江村枝青浜、黒小石出で墓石に類			宝町秋月街道三辻より初む（即ち印石据 込む）																				
一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八																			一七八	

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
23	22	21	20	19	18	17	16	15	中食	中食	中食	中食	中食
(26)	(25)	中食	(24)	中食	(23)	先手中食	後手中食	(22)	中食	(21)	中食	(20)	中食
同	中津城下新博多町	小祝浦	八屋村	松江村枝堺屋	湊村	松原村	元水村枝永井	大橋村	与原村	同	苅田村	朽網村枝新地	下曾根村
同	大分県中津市	大分県中津市	同	豊前市	同	築上町	同	行橋市	同	行橋市	同	苅田町	北九州市小倉南区
同	本陣松葉屋善太郎 豊後屋又左衛門	一向宗西派光専寺	領主より建置く本陣 仮亭主大島徳右衛門	酒造家中屋市左衛門	預主役所	本陣村屋又左衛門	庄屋武左衛門	百姓伴藏	肥後屋藤左衛門	本陣油屋太四郎 大庄屋新津民助	本陣庄屋五郎右衛門 一向宗東派淨嚴寺	庄屋六兵衛	百姓泰蔵 本陣庄屋林蔵
て被相贈。一同辞して帰す。恒星測定	雨逗留。郡奉行より國産刻煙草を人別に目録を似持	恒星測定。中津候より丈長半切紙等被贈下	木星と午中太陽測定 小倉候より贈物、小糸島等被下。並に酒を測。	恒星測定	木星候と午中太陽測定 小倉候より滋飴等被贈下	恒星測定	木星候と午中太陽測定 小倉候より贈物、小糸島等被下。並に酒を測。	恒星測定	木星半周測、恒星測定 蓑島半周測	蓑島半周測	恒星測定 神ノ島一周を測る。	恒星測定	恒星測定
	一七九	一七九	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	木星測量、恒星測量共に不測	木星測量、恒星測量共に不測	木星測量、恒星測量共に不測	木星測量、恒星測量共に不測
(20)	(19)	(18)	中食	(17)	中食	(16)	(15)	(14)	(11)	守江村	守江村	守江村	守江村
神崎町	同	鶴崎三軒町	吉島	鶴崎三軒町	三佐村	府内城下桜町	別府村	亀川村	同	杵築城下中町	杵築城下中町	杵築城下中町	杵築城下中町
同 大分市	同	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 大分市	同 別府市	同 別府市	同	杵築市	杵築市	杵築市	杵築市
百姓嘉右衛門 一向宗西派教高寺	同	本陣和泉屋八右衛門 平野屋治右衛門	庄屋野上喜八	本陣和泉屋八右衛門 平野屋治右衛門	禪宗海長寺	橋本屋八左衛門	本陣庄屋作左衛門 煙草屋市郎兵衛	庄屋与惣兵衛	同	伊予屋春右衛門 本陣佐伯屋小助	伊予屋春右衛門 本陣佐伯屋小助	伊予屋春右衛門 本陣佐伯屋小助	伊予屋春右衛門 本陣佐伯屋小助
恒星測定	雨天逗留	同所逗留測。白滝川端、徳島一周、乙津 川端を測る。	小中島、家島一周を測る。	由布川を渡る、川幅百間。海原川幅八十 一間。熊本候より搗刷木綿等被贈下、受 納。岡候より贈物、絞木綿等被下也。	止宿、酒造家七八百石釀すといふ。領主 より真綿等被贈下、受納。惣年寄を頼み 御贈物を売払う。恒星測定。暦局へ書状 を出す。	北石垣村に鬼ヶ窟といふもの二ヶ所あ り。石郭にて大なり。日本紀第七巻に記 載あり。恒星測定	忠敬木星測量用意に残り居る。午後禅宗 松屋寺に行き大そ鉄を一覽し、八幡宮へ 越し大楠を見る。七ツ頃より曇る。木星 か恒星測量も成らず。	同所逗留測。川崎村より日出城下を歴て 辻間村枝頭成村まで測る。午中を測る。恒 星測定	日出候より保多木綿等被贈下、受納。恒 星測定	同所逗留測。杵築城下より原村尾本尻ま で測る。森久留島候より杉原等被贈下、受 納。恒星測定	同所逗留測。杵築城下より原村尾本尻ま で測る。森久留島候より杉原等被贈下、受 納。恒星測定	同所逗留測。杵築城下より原村尾本尻ま で測る。森久留島候より杉原等被贈下、受 納。恒星測定	同所逗留測。杵築城下より原村尾本尻ま で測る。森久留島候より杉原等被贈下、受 納。恒星測定
一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一

宿泊日・旧暦	文化7年3月 (1810)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号									
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	(4·4)		
(16)	(15)	(14)	中食	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)			
同	地松浦	佐伯城下本町 船頭町	柏江村	同	同	同	佐伯城下本町 船頭町	同	古江浦	大入島 高松浦	津井浦	鳩浦			
同	同 佐伯市	同 佐伯市	同 佐伯市	同	同	同	同 佐伯市	同	同 佐伯市	同 郡上浦町	同	同	大分県津久見市	一向宗東派立法寺	
同	百姓平藏 本陣百姓嘉左衛門	栗屋新左衛門 宮崎儀右衛門	庄屋新五郎	同	同	同	栗屋新左衛門 宮崎儀右衛門	同	百姓十兵衛 三左衛門	本陣禪宗濟家大休庵 庄屋儀兵衛	一向宗西派真宗寺	恒星測定		日食測量。初き前より黒雲連々と出る。 食後一面大曇天、夜も同じ。	
を残して帰宿。	浦崎町斗り。 同所逗留測。 まで逆測。 兩手測初より雨に逢い、 測	大江灘村字長波石より沖松浦字大崎まで 測る。外に八島一周測。風波難測見切七 測定	歴て 大江灘村字長波石まで測る。恒星測定	同所逗留測。 久部村字池田より柏江村を 測る。佐伯城下市中および中方島を測る。	宿。 同所逗留測。出立するが大雨に付止て帰 紙被下也。外に料理代を給る。受納。	古江浦より海崎村中河原まで測る。 同所逗留測。海崎村中河原より佐伯城下 広小路まで測る。佐伯候より御贈物半切	恒星測定	津井浦より古江浦および彦島一周を測 る、ならび大入島測る。恒星測定	大雨逗留	残大入島測る。忠敬・坂部午前高松浦にて地図、午後古江浦へ越す。	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定
一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
25	24 23	22	21	20	19	14
~ 28	~ 27	~ 26	~ 25	~ 24	~ 23	~ 17
同	同	同	畠野浦	同	色利浦	丹賀浦
同	同	同	佐伯市	同	佐伯市	同
同	同	同	富田達右衛門	同	御手洗与七郎	百姓甚十郎
同	同	同	入津浦大庄屋	同	米水津浦大庄屋	源右衛門
恒星測定	同所逗留測。 まで測る。居立浦より逆測、竹野浦河内 まで測る。これより横切山越え峠まで 測る。	風雨、逗留	大風雨、終日に至る。逗留	鼻まで測。野浦字元竜王鼻より居立浦まで測。畠 野浦字小浦より畠野浦を過ぎて字下り松	恒星測定。同所逗留測。鶴岬より字黒鼻より宮野浦字岸ノ鼻 まで測る。小浦字珍崎より鶴ヶ浦まで測。字間越を歴て山 越横切、中越浦字猿戸まで測。字間越より浦白浦字元ノ鼻にて合測。横島測る。	同所逗留測。鶴岬より字元ノ鼻まで測 羽出浦字西浦より丹賀浦を歴て居浦まで 測る。大島へ渡海。大雨になり測量相成らず帰 宿。大島、小間島、高手島一周を測る。梶寄 浦より鶴岬まで測る。中越浦字地下ノ鼻より山越し横切を、米 水津浦内小浦まで測。小浦より字珍崎まで 測。大風にて大浪、測量成らず逗留。
一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三

										宿泊日・旧暦	
										(西暦)	
										宿泊地	
現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号								
13	12	11	10	9	8	7	6	5			
(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	
上別府村美々津	日知屋村細島町	同	尾末浦	鯛名村	鯛名村	同	同	島野浦村	延岡城下南町		
同 日向市	同 日向市	同	門川町	同 延岡市	同 延岡市	同	同	同 延岡市	同 延岡市		
仮亭主伊藤清兵衛 領主客屋	本陣摂津屋善兵衛 豊前屋彦右衛門	同	木屋要藏 本陣讚岐屋庄藏	国次郎 本陣百姓源右衛門	同	同	同	客屋町年寄 渡辺新次郎	本陣庄屋角次 百姓十五郎		
寺村を過ぎ平岩村、才脇村界まで測る。財光 字古田より岬を回り字脇ノ浜を歴て財光 門川村、日知屋村境より後畠浦、字観音 崎を歴て前畠浦入江海辺まで測る。字観音 浦より横切前畠浦入江海辺、字古田を歴 即ち受納。江戸暦局用状届く。唐船波石岬を片測。 て字脇ノ浜まで横切測。	同所逗留測。赤水村天神前より庵川村小 屋谷を歴て加草村海辺まで測る。庵川村小 村、日知屋村境まで測る。乙島一周を測 る。高鍋候より国産贈り物椎茸被下也、 即ち受納。江戸暦局用状届く。唐船波石岬を片測。 寺村を過ぎ平岩村、才脇村界まで測る。財光 字古田より岬を回り字脇ノ浜を歴て財光 門川村、日知屋村境より後畠浦、字観音 崎を歴て前畠浦入江海辺まで測る。字観音 浦より横切前畠浦入江海辺、字古田を歴 即ち受納。江戸暦局用状届く。唐船波石岬を片測。 て字脇ノ浜まで横切測。	青木他三名、風止次第海岸測量に残す。 恒星測定	島、三島を測。恒星測定	島々呂村字打出浜より街道横切加草村海 辺、海岸門川村字尾末浦測所を歴て門川 門を歴て大武町字清高島、川島村字川口 まで測る。元方財島、助兵衛島、大武 島、三島を測。恒星測定	同所逗留測。河原町橋際より逢瀬川橋を 渡り大手北町、坂田橋、岡富村字ツノ原 門を歴て大武町字清高島、川島村字川口 まで測る。元方財島、助兵衛島、大武 島、三島を測。恒星測定	同所逗留測。浦尻村字安井浜より川島村 字荒平を歴て海辺五ヶ瀬川を渡り出北村 方財村界まで測る。五ヶ瀬川渡口より字 新茶屋まで打上げ測。出北村方財村界より字 岡住村字浜子まで打上げ測。江戸暦局よ り書状を出す。	須怒江村字下ノ浜より浦尻村字川口を歴 て字安井浜まで測る。川口より浦尻村入 口まで片測。川船にて着。延岡候より鰹 節を被贈下。即ち受納。	須怒江村字下ノ浜より浦尻村字川口を歴 て字安井浜まで測る。川口より浦尻村入 口まで片測。川船にて着。延岡候より鰹 節を被贈下。即ち受納。	古江村海辺より字越ノ浜を歴て熊野江 村切、熊野江村海辺まで測る。字越ノ浜より山 越横恒星測定	一八四	一八三
一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	一八四	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
21	20	19	18	17	16	15
(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)
江田村	同	同	佐土原城下 蚊口小路 大小路	高鍋城下	瓜生村都濃町	同
同 宮崎市	同	同	同 宮崎市	同 高鍋市	同 都濃町	同
百姓久兵衛 本陣庄屋用左衛門	同	同	本陣油屋友吉 藤屋平五郎	客家 仮亭主岩村重五郎	領主客屋 仮亭主緒県文五郎	同
測定 まで測。 過ぎ、大島村を歴て北方村神武天皇社前を ままで測。後手は直に神武社へ参詣。恒星前を	を測。	同所逗留測。狐島一周を測る。鼠島半周	字荒ヶ下海辺より富田村字和伊金剛尻を歴て下田島村字大炊田海辺まで測。それより佐土原城下へ打上げ測。城主島津淡路守殿より御挨拶御贈物、酒肴被下也。即ち受納。お肥家士、御勘定所よりお肥御渡しの曆局用状を持参。恒星測定	名貫川前より平田村字和伊金剛尻を歴て字荒ヶ下海辺を測。それより高鍋城下へ打上げ測。秋月佐渡守殿より国産御贈物、椎茸被下也。即ち受納。曆局へ書状を出す。恒星測定	昨日の風雨にて行先の小川水増渡川成りがたきにつき逗留。一手測。忠敬は地図をなす。平岩村、才脇村界より才脇村を歴て美々川前までおよび川幅を測る。川前より中島渡口まで片測。中島片測。美々津川端より岩山村字オロノ下を歴て、瓜生村字福原尾までおよび海辺名貫川端を測。字福原尾より都濃町へ打上げ測。	風雨逗留。佐土原島津候より贈物あり、即ち受納。
一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	一八四

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なもの用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真是無理な場合があります。
わからない場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方
左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたもの郵送してください。
その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 inohken@icloud.com
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取つておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地
〒153-10042
東京都目黒区青葉台4-9-6
日本地図センター2F
伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752
(留守の場合は録音テープに吹込んでください。)
事務局メール inohken@icloud.com
郵便振替口座 〇〇一五〇一〇七一八六一〇

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-koko/>

編集後記 ◇本誌のような出版物の編集をしていくつも気になるのは、図などの引用に関する事柄です。出典明記だけで特段の申請を必要としないものから、何ヶ月もかかる手続きをした上で掲載料を支払つてようやく許可が下りる場合まで、いろいろあります。◇図をコピペしたプリントを配布することが多い大学でも、最近は著作権に関する講習の受講を教員に義務づけているところが多くなっています。◇勿論、伊能図そのものは著作権の対象外ですが、有体物に関する所有権や出版権など、周辺の諸権利が関係してくる場合があるようで、事情は複雑です。◇日本人は法律を勝手に解釈するのが得意だ、とある外国人ジャーナリストが評していましたが、出版物や著作権に関するコンプライアンスについては、その道に精通した人に相談しながら慎重に対応する必要がありそうです。（K・T）

次号（第78号）は2016年2月発行
原稿〆切は12月31日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしております！